岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第480集

金栗（かなぐりいち）Ⅰ遺跡発掘調査報告書

主要地方道盛岡和賀線花巻市笹間地区道路改築事業関連遺跡発掘調査

2005

岩手県花巻地方振興局土木部
(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第480集
金栗Ⅰ遺跡発掘調査報告書　正誤表

頁	行	誤り	訂正
P 6	第5図 周辺の遺跡分布図	第5図 キャプション追加	1 金栗Ⅰ(古代・近世)
			2 轟木館(中世)
			3 笹間館(縄文・古代・中世)
			4 森下(平安)
			5 唐戸崎Ⅲ(平安)
			6 唐戸崎Ⅱ(縄文)
			7 向(縄文)
			8 新平(縄文・平安・中世)
			9 鳩岡崎上の台(縄文・平安)
			10 藤沢(奈良・平安)
			11 鳩岡崎三館(平安・中世)
P10	40	仕分けをった	仕分けを行った
P17	31	南側2/5	南側2/5は
P65	写真図版6右下	SD01A c-c´断面	SD01B c-c´断面
	写真図版6右下	SD01B c-c´断面	SD01A c-c´断面

金栗Ⅰ遺跡発掘調査報告書

主要地方道盛岡和賀線花巻市笹間地区道路改築事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、主要地方道盛岡和賀線花巻市笹間地区道路改築事業に関連して平成16年度に発掘調査された花巻市金堀Ⅰ遺跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査では、縄文時代の陥し穴状遺構や近世の溝・柱穴等が見つかりました。県央部ではこれまで近世の調査例は少なく、地域の歴史に新たな一ページを書き加えることができました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました岩手県花巻地方振興局土木部、花巻市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成17年12月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長　合田　武

例　言

1　本報告書は、岩手県花巻市南笹間第１地割45番地ほかに所在する金梨Ｉ遺跡発掘調査結果を収録したものである。

2　本遺跡の発掘調査は主要地方道盛岡和賀線花巻市笹間地区道路改築事業工事関連事業に伴い、岩手県教育委員会生涯学習文化課・岩手県花巻地方振興局土木部の協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（以下埋文センターと略称）が記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。

3　今回の発掘調査による成果は平成16年度の岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第469集「平成16年度発掘調査報告書」・現地公開（平成16年10月15日）にて公表してきたが、本書が公式な報告書であるので上記の刊行物との違いがある場合は、本書が優先する。

4　岩手県遺跡登録台帳番号と調査時の遺跡略号は、以下のとおりである。

遺跡登録台帳番号……ＭＥ44－1350

遺跡略号……ＫＧＩ－04

5　野外の調査期間・調査面積と調査担当者は、以下のとおりである。

調査期間　平成16年９月15日～10月20日

調査面積　1,176㎡

担当者　島原弘征・菅野　楢

6　室内整理期間と整理担当者は、以下のとおりである。

整理期間　平成16年11月１日～平成16年12月31日

担当者　菅野　楢

7　本報告書の原稿執筆はⅠを岩手県花巻地方振興局土木部、Ⅵを分析担当者、他を島原が行った。編集は島原が行った。

8　座標原点の測量および空中写真撮影は次の機関に委託した。

座標原点の測量……慶長測量設計

空中写真……東邦航空㈱

9　自然科学関連の分析鑑定は次の機関に委託した。

石質鑑定……花崗岩研究会

炭化材同定……岩手県木炭協会

井戸枠の樹種同定……古環境研究所

10　本報告書の作成にあたり、次の方々ならびに機関からご指導とご協力をいただいた（敬称略・順不同）。

浅田智晴・太田代一彦・大橋康二・葛城和穂・工藤雅樹・小針大志・斎藤正・酒井宗孝・佐藤晃子・新海和広・鈴木琢也・高橋信雄・丹治篤嘉・千葉悟・花巻市教育委員会

11　野外調査は、花巻市・北上市・石鳥谷町の作業員28名にご協力いただいた。

室内整理作業は、当埋文センター期限付職員１名で行った。

12　土壌観察の土色は、『新版標準土色帳』（小山正忠・竹原秀雄：1992）によった。

13　本報告書で使用した地形図は、国土地理院発行のものであり、図中に図幅名と縮尺を記している。

14　本遺跡から出土の遺物および調査に関わる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管・管理している。

目　次

Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1

Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 1
1　遺跡の位置と立地 …… 1
2　周辺の遺跡 …… 5

Ⅲ　調査の概要と整理方法 …… 9
1　調査経過 …… 9
2　野外調査の方法 …… 9
3　室内整理の方法 …… 10
4　整理経過 …… 12

Ⅳ　基本層序 …… 12

Ⅴ　検出遺構と出土遺物 …… 14
1　概　要 …… 14
2　縄文時代の遺構 …… 14
3　古代・近世以降の遺構 …… 17
(1)竪穴状遺構 …… 17
(2)井戸跡 …… 18
(3)土坑 …… 19
(4)溝跡 …… 27
(5)柱穴状土坑 …… 42

Ⅵ　自然科学分析 …… 51

Ⅶ　ま と め …… 53
1　遺構 …… 53
2　縄文・古代の遺物 …… 54
3　近世の遺物 …… 55
4　ま と め …… 56

図版目次

第1図　岩手県全図 …… 1
第2図　遺跡の位置図 …… 2
第3図　周辺の地形と調査範囲 …… 3
第4図　地形分類図 …… 4
第5図　周辺の遺跡分布図 …… 6
第6図　基本土層柱状図 …… 12
第7図　遺構配置図 …… 13
第8図　ＳＫＴ01～03陥し穴状遺構 …… 15
第9図　ＳＫＴ04・05陥し穴状遺構 …… 17
第10図　ＳＫＩ03竪穴状遺構、同出土遺物 …… 18
第11図　ＳＥ01井戸跡 …… 19
第12図　ＳＫ05土坑、同出土遺物 …… 19
第13図　ＳＫ06土坑 …… 20
第14図　ＳＫ06土坑出土遺物(１) …… 21
第15図　ＳＫ06土坑出土遺物(２) …… 22
第16図　ＳＫ06土坑出土遺物(３) …… 23
第17図　ＳＫ07土坑 …… 24
第18図　ＳＫ07土坑出土遺物 …… 25
第19図　ＳＫ08土坑、同出土遺物 …… 26
第20図　溝跡図面（第21・23・24図）割付図 …… 27
第21図　ＳＤ02～04・06～08溝跡、埋没沢(１) …… 29
第22図　ＳＤ02～04・06～08溝跡、埋没沢(２) …… 31
第23図　ＳＤ12～14溝跡、柱穴状土坑(１) …… 35
第24図　ＳＤ01Ａ・Ｂ・05・09～11溝跡(１)、柱穴状土坑(２) …… 37
第25図　ＳＤ01Ａ・Ｂ・05・09～11溝跡(２) …… 39
第26図　ＳＤ01・03溝跡・柱穴状土坑出土遺物 …… 41
第27図　遺構外出土遺物(１) …… 45
第28図　遺構外出土遺物(２) …… 46
第29図　遺構外出土遺物(３) …… 47

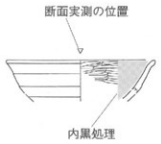
表目次

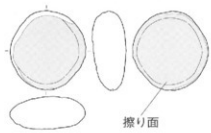
第1表　柱穴状土坑観察表 …… 43
第2表　土器観察表 …… 48
第3表　陶磁器観察表 …… 49
第4表　石製品観察表 …… 50
第5表　土製品観察表 …… 50
第6表　金属製品観察表 …… 50
第7表　木製品観察表 …… 50
第8表　遺物出土量一覧 …… 58

写真図版目次

写真図版1　航空写真 …… 60
写真図版2　調査区全景・調査前風景 …… 61
写真図版3　陥し穴状遺構 …… 62
写真図版4　竪穴状遺構・井戸跡 …… 63
写真図版5　土坑 …… 64
写真図版6　溝跡(１) …… 65
写真図版7　溝跡(２) …… 66
写真図版8　溝跡(３) …… 67
写真図版9　溝跡(４) …… 68
写真図版10　溝跡(５) …… 69
写真図版11　溝跡(６)・現地公開風景 …… 70
写真図版12　堰没沢 …… 71
写真図版13　ＳＥ01、ＳＫＩ03、ＳＫ05・06(１)出土遺物 …… 72
写真図版14　ＳＫ06(２)～08、ＳＤ01・ＳＤ03、Ｐ98・Ｐ210出土遺物 …… 73
写真図版15　遺構外出土遺物 …… 74

凡例





Ⅰ　調査に至る経緯

金栗Ⅰ遺跡は、「笹間地区道路改築事業」の実施に伴いその事業区間内に存することから、発掘調査を実施することになったものである。

協議の経過は、平成15年３月４日付け「花地土第796号」により花巻地方振興局長から花巻市教育委員会委員長及び北上市教育委員会委員長あてに笹間地区道路改築事業にかかわる遺跡の分布調査について依頼を行い、当該事業範囲には、牛小渕Ⅰ遺跡、金栗Ⅰ遺跡、金栗Ⅱ遺跡、堰の下Ⅱ遺跡が存在した。

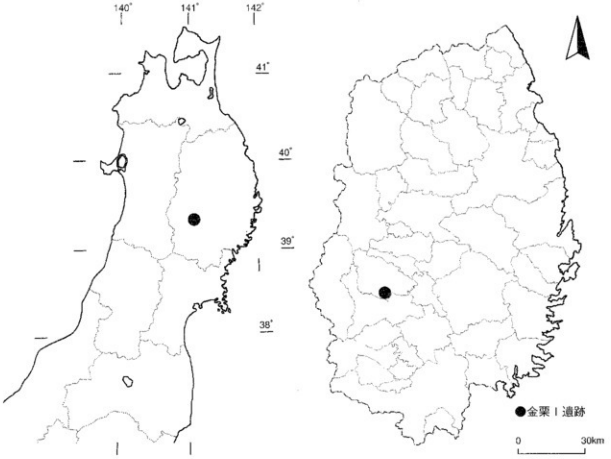
これを受け、12月に岩手県教育委員会に４遺跡の試掘調査を依頼し、試掘結果、金栗Ⅰ遺跡が要発掘調査となった。その結果を踏まえ岩手県教育委員会事務局との協議を行い、発掘調査を(財)岩手県文化振興事業団に調査を依頼することとなった。　　(岩手県花巻地方振興局土木部)

Ⅱ　遺跡の位置と環境

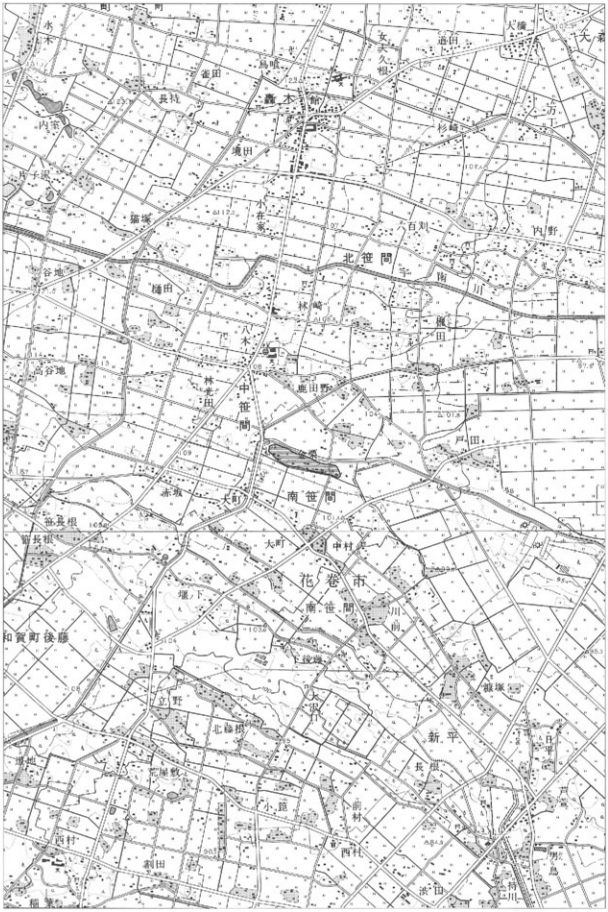
1　遺跡の位置と立地

(1) 遺 跡 の 位 置

金栗Ⅰ遺跡は、岩手県花巻市南笹間第１地割45番地ほかに所在する。ＪＲ東北本線花巻駅の南西約８㎞、北緯39度20分15秒、東経141度03分11秒付近に位置する。本遺跡の所在する花巻市は岩手県南

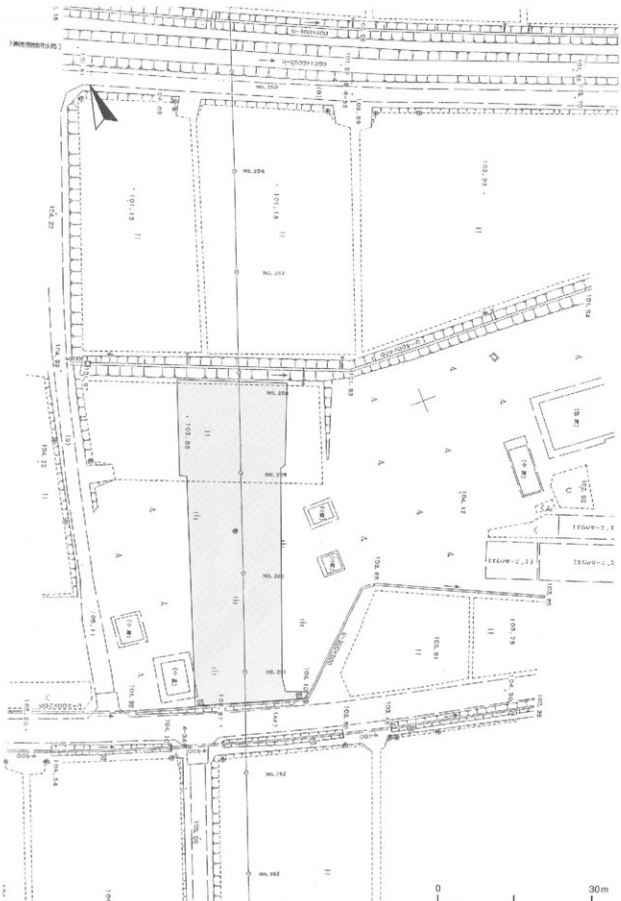


第１図　岩手県全図

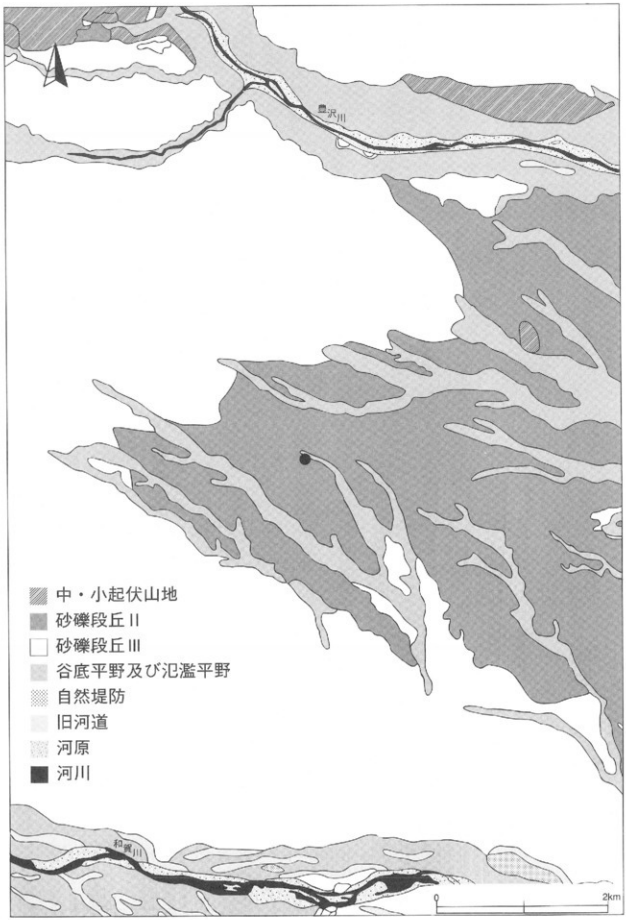


25,000分の1　花巻、北上

第2図　遺跡の位置図



第３図　周辺の地形と調査範囲


豊沢川
中・小起伏山地
砂礫段丘 II
砂礫段丘 III
谷底平野及び氾濫平野
自然堤防
旧河道
河原
河川
和賀川
0
2km

第 4 図　地形分類図

の西側内陸部に位置し、西側の奥羽山脈と東側の北上山地に挟まれた南北に長い北上盆地の中央付近にある。北側は稗貫郡石鳥谷町・岩手郡零石町、東側は和賀郡東和町、南側は北上市、西側は和賀郡沢内村と隣接している。面積は385.4㎢、人口は72,365人である（平成17年５月末現在）。古くは北上川と瀬川・豊沢川との間に挟まれた台地上に位置する近世花巻城の城下町として栄え、現在は近隣の石鳥谷町・大迫町・東和町を含めた花巻(稗貫)地区の中心的役割を果たしている（註１）。

（2）地形・地質

四国四県に匹敵する広大な面積を有する岩手県は、東に北上山地、西に奥羽脊梁山脈が南北に延びている。岩手縣岩手町御堂観音境内に端を発する北上川は奥羽山脈と北上山地に挟まれた南北に長い北上盆地を南流し、宮城県追波湾に至る。もともとは宮城県石巻市で太平洋に注いでいたが、昭和に入って大改修を加え流路を変えている。全長249km、流域面積10,150㎢を誇る東北地方最大の河川で、その勾配は緩い河川である。盛岡以北を上流域、盛岡～前沢間を中流域、前沢以南を下流域と３区域に区分されている。

遺跡が所在する花巻市の地形は北上川が大きく蛇行しながら南流しているが、その両岸では対照的な様相を呈している。**西側（右岸）**は松倉山・円森山等の標高200～900m級の奥羽山系の支脈をなす山地からなる。新第三紀中新世のグリーンタフ活動による安山岩～流紋岩質岩を主体とし砂岩・礫岩・頁岩を伴うこの山地からは豊沢川・瀬川等の北上川支流が東流し、洪水堆積物と流路の変遷を起因とする扇状地が形成されている。またその東側では南流する北上川の旧河床が段丘化した河岸段丘が発達している。河岸段丘は上・中・下の新旧３段以上に分類される。上位段丘は村崎野北側の西根段丘、中位段丘は村崎野周辺の村崎野段丘、下位段丘は金ヶ崎段丘である。上・中位段丘は下位段丘上に残丘状に残る。**東側（左岸）**は北上山地の山麓縁辺部と標高150～250m前後の丘陵が比較的勾配をもって広がる。泥岩・チャート・花崗岩・凝灰岩・蛇紋岩・安山岩・砂岩・頁岩からなるこの山麓・丘陵部を猿ヶ石川・稗貫川などの河川が西流している。流域には沖積地・河岸段丘の広がりが認められるが、発達は不良でその範囲は狭い。

金渠Ⅰ遺跡は中位段丘の縁辺部に位置している。標高は103m前後を測る。調査前現況は水田・宅地である。

註

1．花巻市、石鳥谷町、大迫町、東和町は平成18年１月１日に新設花巻市として合併する予定（平成17年３月31日現在）。

2　周辺の遺跡

『岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧』によると、花巻市内で315ヶ所、北上市内で431ヶ所の遺跡が確認されている。このうち第５図には過去に調査例のある遺跡ならびに金渠Ⅰ遺跡と関連があると思われる古代～近世の遺跡を中心に花巻市38ヶ所、北上市41ヶ所図示した。北上市域では東北自動車道・広域農道関連、北上南部工業団地・ほ場整備にかかる緊急調査が行われているが、花巻市西南地区では、分布・試掘調査等は行われているが、本調査が行われた遺跡はあまり多くない。

ここでは金渠Ⅰ遺跡と関連のある古代・近世の遺跡を中心に概観する。本地域の縄文時代については千葉（岩埋文2001a）、金子（岩埋文2003）が概説しているので、それを参照していただきたい。

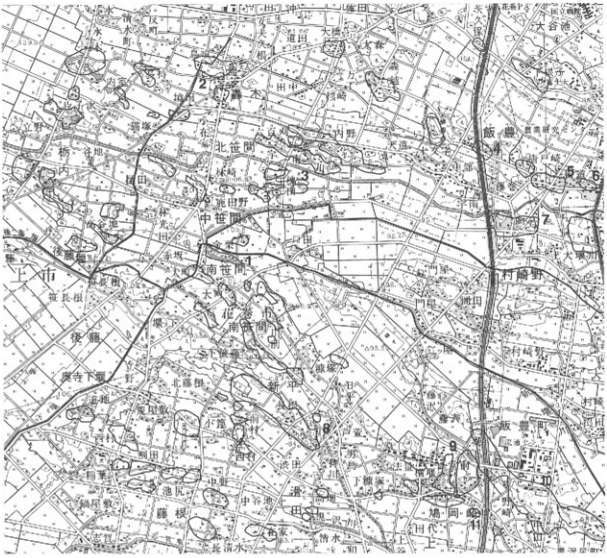
(1) 過去の調査について

金栗1遺跡における過去の調査は平成5年に詳細分布調査が行われたのみである。その際に土師器・須恵器が採集されている。今回の調査は遺跡範囲のほぼ中央付近に位置している。調査前現況は宅地と水田である。地元の古老の話によると近年まで神山家の宅地があったという。神山家は江戸期に医者のいなかった笹間村に花巻城下より招聘され、そのまま定着し、代々医者を生業としていたといわれている（註1）。

(2) 周辺の遺跡

古代・中世

本地区の古代の主な遺跡としては新平遺跡（8）、鳩岡崎上の台（9）、鳩岡崎三館（11）、藤沢遺跡（10）等がある。図中に含まれていないが、熊堂古墳群、石持Ⅰ・似内・上似内・上台・高木中館・狼沢Ⅱ・庫理・古館Ⅱ・万丁目遺跡等がある。いずれの遺跡も低・中位段丘上もしくは谷底・氾濫平野に立地している。似内遺跡では県内最大級の規模（8.9×9.3m）をもつ竪穴住居跡が検出され、焼



50,000分の1　花巻・北上

第5図　周辺の遺跡分布図

失住居から炭化した胡桃・麦・栗などが多量出土している。また、漁労に使用されたと思われる十錘が一棟の竪穴住居から346点出土したり、平安期（９世紀代）の竪穴状遺構から金銅仏が出土している。胡四王山遺跡の南西斜面からは20棟を超える平安期の竪穴住居跡が検出されている。また、庫理遺跡からは線刻水鳥の描かれた土器が出土している。

中世城館で調査された遺跡としては笹間館（３）・轟館（２）がある。図中に含まれていないが北上市域では二子城・観音館・岩崎城・鹿島・兵庫館・月館・八幡館、花巻市域では根子館・上似内遺跡等が調査されている。笹間館は昭和61年には場整備に係る緊急調査が行われている。幅11～14m、深さ最大４mを測る水堀によって六郭に分けられ、うち中央の二郭（東館・西館）の調査が行われた。報告書によると掘立柱建物跡72棟、柱穴列（塀？）10条、門跡５ヶ所、竪穴建物３基、井戸跡８基、カマド状遺構１基、蓄銭遺構１ヶ所等が検出されている。遺物も国産陶器・中国産陶磁器、渡来銭514枚等が出土している。時期は15～16世紀の城館であるが、15世紀前半代に焼失し、その後再建されたことが発掘調査において確認されており、報告者はその原因を永享７年の兵乱ではないかと推測している。笹間館は和賀氏・笹間氏が居住したとされているが、定かではない。轟木館は平成２・９年に個人住宅建設に係る緊急調査が行われ、溝・土坑・柱穴・土塁等が検出されている。根子館はほ場整備や個人住宅建設に係る調査が複数回行われ、溝・土坑や多数の柱穴等が検出されている。根子館は稗貫氏の分族（支族）である根子氏が居住したとされている。上似内遺跡からは中世似内館に伴う堀跡３条が検出されている。似内館は稗貫氏の分族（支族）である似内氏が居住したとされている。本地域の中世城館については『岩手県中世城館調査報告書』や前述の笹間館・上似内遺跡の調査報告書にまとめられているのでそれを参照していただきたい。

近　世

今回の調査では数こそ少ないが、近世の遺構・遺物が出土している。本地域における近世遺跡の調査例は花巻城等があるが、調査事例はあまり多くない（註２）。

註

１．ちなみに19世紀代に神山了安という医者がいたと言われている。大正四年（1914）に刊行された笹間村誌によると、了安は（19世紀初頭に）南昌岡の代々医業を生業とする家に生まれた。沢内村の小川嶋嘉左衛門と共に尻平川より沢内村に至る道路を開削することを志し、北斧岡の猪塚彦内郎に依頼し、私財を投じて尻平川から、尻平川の左岸に沿って赤石沢に至り、川を渡り姉打沢を越えて上流の弥左衛門沢より北西に向かい七内に至る道路を開削したと言われている。弘化３年（1846）に完成したこの道路は後年医者街道と呼ばれていたという。

２．市役所第二庁舎建設等に係る緊急調査や花巻城環境整備事業の一環としての内容確認調査等で14次にわたる調査が行われている。掘立柱建物跡・礎石柱建物跡、竪穴状遺構、園地、カマド状遺構、鉄滓溜遺、鉄而焼み石塩・精形・十盤、石敷遺構、溝跡・鞆十器・土坑・柱穴等が検出され、陶磁器片・瓦片・鉄製品・漆製品・木製品・寛永通宝等が出土している。

参考文献

岩屋文 1986 『笹間遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第124集
岩邦文 1996 『鳩岡崎上の台発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第240集
岩郷文 1998 『東郷遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第302集
岩理文 2000 『徳内遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第344集
岩滝文 2001a 『滝水ノ野遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第351集
岩埋文 2001b 『石持1遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第341集
岩埋文 2002 『上徳内遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第379集
岩埋文 2003 『新田遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第405集
岩埋文 2004 『銅谷地遺跡第8次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第454集
岩埋文 2004 『上台Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第459集
岩埋文 2004 『滝ノ沢遺跡群発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第456集
岩手県和賀中央土地改良区 1975 『和賀中央土地改良史』
笹間郷土誌編集委員会 1994 『笹間郷土誌』
笹間村 1914 『笹間村誌』
花巻市教育委員会 1969 『花巻市史（史蹟花巻城）』
花巻市教育委員会 1986 『花巻市史（資料編）』
花巻市教育委員会 1991 『西南地区文化財調査報告書』
花巻市教育委員会 1994 『平成5年度花巻市内遺跡詳細分布調査報告書』
花巻市教育委員会 1998 『平成9年度花巻市内遺跡発掘調査報告書』
花巻市教育委員会 2000 『平成11年度花巻市内遺跡発掘調査報告書』
花巻市教育委員会 2001 『平成12年度花巻市内遺跡発掘調査報告書』

※岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターは岩埋文と省略した。

Ⅲ　調査の概要と整理方法

1　調　査　経　過

野外調査は９月15日から10月20日まで行った。９月15日に機材を搬入し調査員２名、作業員28名で作業を開始。９月21日重機を投入し表土除去と遺構検出を開始する。９月22日基準点設置。９月24日表土除去が終了する。９月27日検出が終了し遺構数が確定したので精査を開始する。10月12日に終了確認が行われる。10月15日午後に現地公開を開催する（参加者120名。花巻市立笹間第一小学校６年生30名の遺跡見学もあわせて行う。）。10月18日花巻市立花巻北中学校生30名が現場見学に訪れる。10月20日に機材を搬出して撤収した。

2　野外調査の方法

（1）グリッドの設定

調査区のグリッドは調査区域ならびに遺跡範囲全体をカバーできるように世界座標に合わせて、座標設定及びグリッド設定を行うこととした。

遺跡の北西隅に位置するＸ＝-73000.000、Ｙ＝18500.000を起点とし、50×50ｍの大グリッドを設定し、さらに大グリッドの一辺を10等分して５×５ｍの小グリッドを設定した。大グリッドは西から東に向かってＡ、Ｂ、Ｃとアルファベットの大文字と、北から南に向かってⅠ、Ⅱ、Ⅲとローマ数字を組み合わせてＩＡのように表記した。小グリッドは西から東にａ～ｊとアルファベット小文字と、北から南に１～10とアラビア数字を組み合わせて１ａのように表記した。作業を行う際にはグリッドの北西隅の杭にグリッド名を記入し、ＩＡ１ａグリッドというような表記をした。基準点は業者に委託して打設した。調査時にはその基準点を使用して調査区の区割り・グリッド設定を行った。各地区で使用した基準点の座標値は下の通りである。

	Ｘ（世界測地系）	Ｙ（世界測地系）	Ｘ（日本測地系）	Ｙ（日本測地系）	標高（m）	グリッド名
基１	-73175.000	18655.000	-73483.2228	18954.9663	103.389	ⅣＤ６ｂ
基２	-73225.000	18655.000	-73533.2232	18954.9678	103.782	ＶＤ６ｂ
補１	-73200.000	18665.000	-73508.2231	18964.9669	103.740	ＶＤ１ｄ
補２	-73200.000	18655.000	-73508.2230	18954.9671	103.918	ＶＤ１ｂ
補３	-73225.000	18640.000	-73533.2233	18939.9677	103.890	ＶＣ６ｉ

（2）粗掘と精査

＜粗掘＞平成15年度に行われた試掘結果をもとに、試掘トレンチの再掘ならびに新規に試掘トレンチを設定し、その上層断面を観察し層序の把握に努めた。その結果、遺物がほとんど見られないⅠ・Ⅱ層に関しては重機を使用して除去した。

＜精査＞基本的には竪穴住居・竪穴状遺構は４分法、土坑等は２分法による埋土の観察を行った。堀・溝に関しては適時ベルトを設定し埋土の観察を行った。作業の都合上、柱穴状土坑に関しては埋土の

堆積状況をパターン化し、各類の代表のみ断面記録を取った。
＜遺物の取り上げ＞遺構内に関しては遺構名と埋土層位を、遺構外に関してはグリッド名を袋に記入してから取り上げた。グリッド設定以前の遺構外出土遺物は調査区内のおおよその位置を袋に記入してから取り上げた。出土地点を実測した遺物に関しては取り上げ番号を記入した。

（3）遺構名について

遺構種類の略号はＳＤ：溝跡、ＳＫ：土坑、ＳＫＩ：竪穴状遺構、ＳＫＴ：陥し穴状遺構である。この遺構略号に2桁の数字を組み合わせて遺構名とした。
＜重複遺構の遺構名について＞精査の過程で住居等の拡幅・建て替え等で重複が確認された場合には新しい方からＡ、Ｂ、Ｃと登録することにした。
＜遺構名の変更＞精査の過程ならびに室内整理段階で遺構の性格が当初想定していたものと異なった場合には、掲載時に遺構名を変更している。そのため、遺構名を変更した遺構の旧番号や、登録抹消した遺構の番号はそのままにして、番号を詰めることをしなかったため結果的に連番にはなっていない。

（4）遺構の記録

遺構の記録は実測図と写真撮影と、図面で表現できない所はデジタルカメラとフィールドカードに記録している。
＜図面＞遺構の平面形、遺物出土状況を記録した平面図、ならびに遺構の断面形・埋土の堆積状況を記録した断面図を作成した。エレベーション図は必要に応じて作成した。作図は簡易遣り方測量を準用し、精査途中で随時作図記録している。縮尺は基本的には1/20を原則とし、遺構が長大なため遣り方測量をするには困難な溝に関しては平板測量で1/50で作図した。
＜写真＞遺構検出状況、堆土堆積状況、遺物出土状況、完掘状況といった具合に精査の各段階毎に必要に応じて撮影を行っている。フィルムは35㎜判のモノクロとリバーサル、モノクロに関しては6×7㎝版も使用している。また、状況に応じてデジタルカメラを使用してメモ的写真を撮影している。遺跡遠景、調査終了全景はセスナ機による空中撮影にて行った。

3　室内整理の方法

図面点検・遺物の洗浄・写真整理は原則として現場で行うこととしたが、期間の後半は調査に追われ、一部は野外調査終了後に行っている。

（1）遺構図面

遺構図面は点検後、第二原図を作成しトレースを行った。
挿図中の縮尺
竪穴状遺構・掘立柱建物跡は1/60、**土坑と堀・溝・柱穴状土坑の断面図**は1/40、**堀・溝・柱穴状土坑の平面図**は1/100を原則とした。任意縮尺に関しては脇にスケールをつけた。

（2）遺　　物

遺物は洗浄後、出土遺物の全てを点検し遺構内外と遺物の種別毎に仕分けをった。仕分け後注記・

接合・復元と作業をすすめ、実測・採拓が必要なものを選んで登録した。登録後は実測・トレース・写真撮影・図版作成と作業を進めた。実際の作業は調査員が仕事の計画と指示・点検を、作業員が実際の仕事を行うといった具合に分担している。

掲載基準

＜土器・陶磁器＞接合復元したものの中で器形がおおよそ分かるものは全て掲載した。遺構内から出土した遺物が少ない遺構の土器に関しては口縁部・底部破片を選択した。点数が多いもしくは類似した器形が多いものに関しては、床面・底面出土のものを優先して選択した。

＜石製品＞点数が少ないこともあり、出土したもの全点を登録し掲載した。

＜木製品＞ＳＥ01井戸跡の井戸枠のみである。登録し写真掲載した。

挿図中の縮尺

土器・陶磁器は原則として1/3、**石製品**に関しては1/2を原則とした。任意縮尺に関しては脇にスケールをつけている。

（3）写　　真

野外調査中に撮影した写真は、フィルムの種類毎にモノクロはネガアルバムにリバーサルはスライドファイルに撮影順に整理して台帳に記入した。

遺物は当センターの写真技師が35㎜判フィルムで撮影した。現像終了後、種別毎に整理を行った。

（4）凡　　例

本書で使用したスクリーントーンは凡例に示したとおりである。また、土器実測図の上に記した▽は断面実測の位置を示したものである。

観察表中で使用している法量の推定値は（　）、残存値は［　］、計測値はcmで表示している。竪穴状遺構の床面積はプラニメーターで下場のラインを３回計測した値の平均値を示している。重量はgで表示している。

土器・陶磁器の実測図表現について

＜土器＞調整を以下の基準で分類し、実測した。なお、分類の際には「細谷地遺跡第８次発掘調査報告書」（岩理文2004）を参考にした。

ハケメ　　：不定方向で断続的な細かい条線をもつもの。

ヘラナデ　：不定方向で断続的な明瞭な条線を持たないもの。弱い・細かいハケメ。

ヘラケズリ：不定方向で断続的な砂粒の動きが認められるもの。

ヘラミガキ：断続的に光沢のある細い単位の筋。

ヨコナデ　：横方向の連続的な粘土の動き。

ロクロナデ：横・螺旋方向に連続した粘土の動き。回転ナデ。

実際にはこの分類に当てはまらないものもあるが、それに関しては観察表中に記載することで補うこととした。調整の実測は内外面ともに中央から半分にとどめた。

＜陶磁器＞外形のみ実測・トレースを行い、染付に関しては実測を行っていない。本来であれば実測すべきであるが、整理期間の制約から実測図と同寸の写真を脇に貼付することで実測図の代替とした。この方法で実測図が伝えられる情報の全てが表現できるとは思えないが、一定程度の情報量は示せるものと考えている。

4 整 理 経 過

11月1日作業員1人で整理開始。室内整理担当調査員は野外調査のため不在。土器の水洗・注記・接合・復元を順次進める。12月より実測開始。12月28日整理期間終了。残る仕事は拓本・トレース・図版作成・写真図版等々量は少ないが多岐にわたる。残りの整理作業を島原が引き継ぎ、平成17年1～3月に行った。

Ⅳ 基 本 層 序

Ⅰ層　表土層（黒色～黒褐色土）
宅地撤去時の攪乱が激しい。土師器・須恵器・陶磁器が出土。

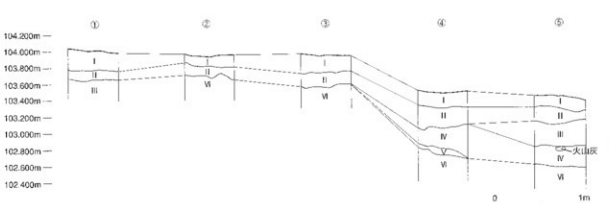
Ⅱ層　盛土層（黒色～黒褐色土）
庭造成時に盛土された層。調査区南で確認。

Ⅲ層　旧表土層（黒色土）
調査区南の盛土下で部分的に確認。調査区北は開田時の削平で消失。

Ⅳ層　自然堆積層（黒色土）
調査区北の埋没沢で確認。十和田ａ降下火山灰含む。古代の遺物包含層。

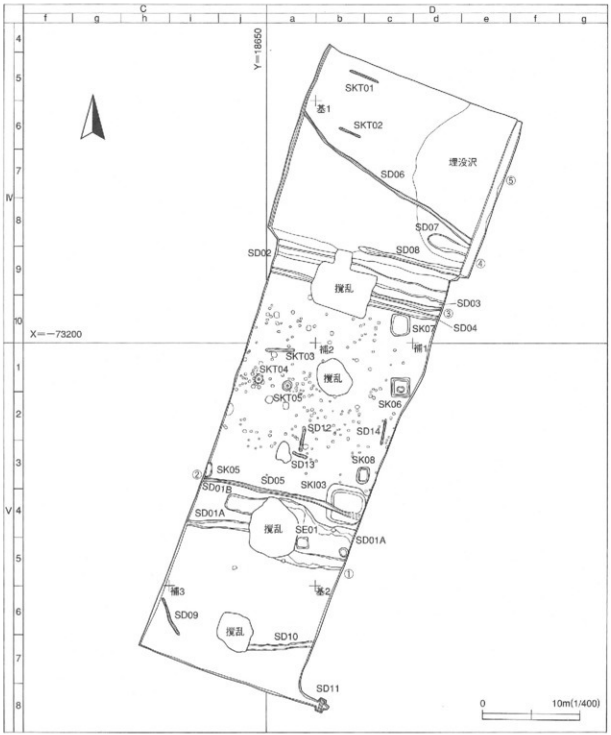
Ⅴ層　自然堆積層（黒色土）
調査区北の埋没沢で確認。遺構・遺物は認められない。湧水著しい。

Ⅵ層　基盤層（浅黄色層）
調査区南では灰黄色に近くなる。削平が著しい。縄文～近世までの遺構全ての検出面。



丸数字は第7図と対応

第6図　基本土層柱状図


C
D
f
g
h
i
a
b
c
d
e
f
g
4
5
6
7
8
9
10
1
2
3
4
5
6
7
8
M
V
Y=18650
X=−73200
SKT01
基1
SKT02
埋没沢
SD06
⑤
SD07
SD02
SD08
④
攪乱
SD03
③
SK03
SD04
補1
補2
SKT03
SKT04
攪乱
SKT05
SK06
SD12
SD14
SD13
SK08
②
SK05
SD05
SKI03
SD01B
SD01A
攪乱
SE01
SD01A
①
基2
補3
SD09
攪乱
SD10
SD11
0
10m(1/400)

第７図　遺構配置図

Ⅴ　検出遺構と出土遺物

1　概　　要

今回の調査では縄文時代の陥し穴状遺構５基、時期不明の竪穴状遺構１棟・土坑４基・溝跡15条・柱穴状土坑212個等を検出した。

調査区中央より北は陥し穴状遺構と溝、中央は竪穴状遺構・土坑・溝・柱穴状土坑、南は溝が分布している。溝は調査区全域でみられるが、その大半が中央より南に分布し時期不明のものが大半を占めている。調査区北に位置する溝の所属時期は古代の可能性が高い。Ⅱで前述したが、今回の調査区の調査前現況・地目は中央より南は宅地、北部が水田である。宅地は近世末以降連続して土地利用されていた。今回の検出遺構は縄文～古代が調査区北、近世以降～時期不明のものが中央から南に分布している。

調査区北にはⅣ・Ⅴ層の広がりが認められた。Ⅳ層中から上師器・須恵器が出土し、二次堆積の十和田ａ降下火山灰が認められた。トレンチを入れて遺構の有無を確認したが、遺構は検出されなかった。状況からみて、このⅣ・Ⅴ層の広がりは埋没沢であると思われる。調査区外の南東側斜面上位に古代の遺構がある可能性が想定される（第21・22図、写真図版12）。

2　縄文時代の遺構

（1）陥し穴状遺構

調査区中央～北を中心に溝状３基、円形状２基の計５基検出した。溝状は規模・軸方向がほぼ同じである。遺物は出土していない。所属時期は埋土がⅤ層起源の黒色土であることから、Ⅴ層堆積以前の縄文時代の遺構である可能性が高い。

ＳＫＴ01陥し穴状遺構

遺　構（第８図、写真図版３）

＜位置・検出状況＞調査区北、ⅣＤ５ｂ・５ｃグリッドに位置する。検出面は標高103.2ｍ付近のⅥ層上面で、Ⅴ層起源と思われる黒色土の溝状プランを検出した。重複する遺構はない。南約5.7ｍにＳＫＴ02が位置する。

＜平面形・規模＞胴口部は長軸3.00ｍ、短軸26cmの溝状を呈する。深さは40～44cmを測る。北・南壁は若干外傾し、東・西壁はオーバーハングしている。底部の規模は長軸3.22ｍ、短軸10cmを測る。

＜方向＞西北西－東南東方向（Ｗ－23°－Ｎ）である。

＜埋土＞Ⅴ層起源の黒色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。下位を中心に壁の崩落土と思われるⅥ層起源の浅橙色土を少量含んでいる。

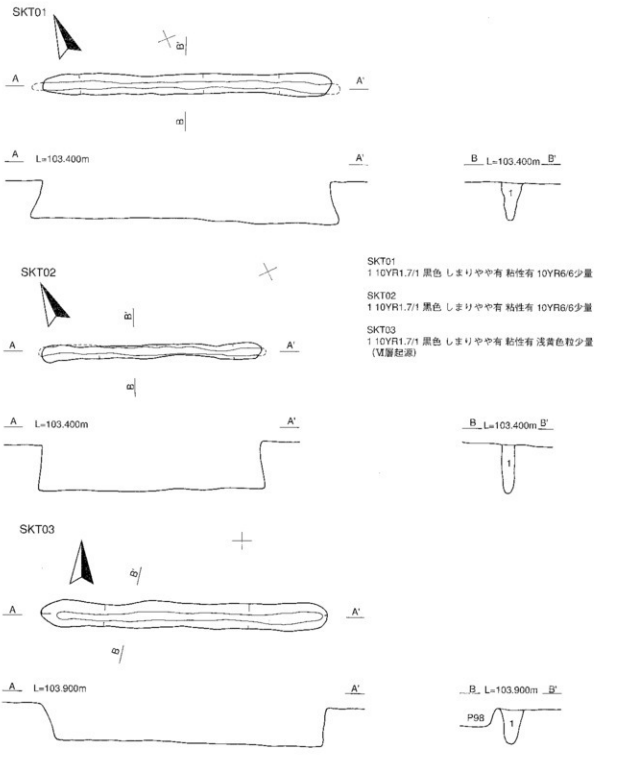
＜底面＞概ね平坦である。底面ピットは検出されなかった。底面付近の標高はおよそ102.8ｍ前後を測る。

遺　物

出土しなかった。

ＳＫＴ02陥し穴状遺構

遺　構（第８図）



第８図　ＳＫＴ01～03陥し穴状遺構

＜位置・検出状況＞調査区北、ⅣＤ６ｃグリッドに位置する。検出面は標高103.2m前後のⅥ層上面で、Ⅴ層起源と思われる黒色土の溝状プランを検出した。重複する遺構はない。北約5.7mにＳＫＴ01、南約2.3mにＳＤ07が位置する。

＜平面形・規模＞開口部は長軸2.30m、短軸20cmの溝状を呈する。深さは46～52cmを測る。北・南壁は直立し、東・西壁はオーバーハングしている。底部の規模は長軸2.38m、短軸10cmを測る。

＜方向＞西北西－東南東方向（W－24°－N）である。
＜埋土＞Ⅴ層起源の黒色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。下位を中心に壁の崩落土と思われるⅥ層起源の浅橙色土を少量含んでいる。
＜底面＞概ね平坦である。底面ピットは検出されなかった。底面付近の標高はおよそ102.7m付近を測る。

遺　物

出土しなかった。

ＳＫＴ03陥し穴状遺構

遺　構（第８図、写真図版３）

＜位置・検出状況＞調査区中央、ＶＤ１ａグリッドに位置する。検出面は標高103.7～103.8mのⅥ層上面で、Ⅴ層起源と思われる黒色土の溝状プランを検出した。重複する遺構はない。北約7.2mにＳＤ04、南約2.9mにＳＫＴ05、南南西約2.6mにＳＫＴ04が位置する。
＜平面形・規模＞開口部は長軸2.96m、短軸30cmの溝状を呈する。深さは36～40cmを測る。壁は外傾している。底部の規模は長軸2.80m、短軸11cmを測る。
＜方向＞東西方向（W－0°－N）である。
＜埋土＞Ⅴ層起源の黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。下位を中心に壁の崩落土と思われるⅥ層起源の浅橙色土を少量含んでいる。
＜底面＞概ね平坦である。底面ピットは検出されなかった。標高は103.2m付近を測る。

遺　物

出土しなかった。

ＳＫＴ04陥し穴状遺構（ＳＫ03）

遺　構（第９図、写真図版３）

＜位置・検出状況＞調査区中央、ⅣＤ１ｊグリッドに位置する。検出面は103.8m付近のⅥ層上面で、Ⅴ層起源と思われる黒色土の円形プランを検出した。北北東約2.6mにＳＫＴ03が位置する。
＜重複関係＞Ｐ102・109・111に切られている。
＜平面形・規模＞開口部径100×88cmの楕円形状を呈する。深さは57cmを測る。壁はほぼ直立気味に立ち上がる。底部径82×68cmを測る。
＜埋土＞Ⅴ層起源の黒色土を主体とした自然堆積を呈し、２層に分けられる。
＜底面＞概ね平坦で、中央付近に径26×23cmの楕円形状を呈し、深さ30cmを測るピット１基を検出した（ピットの底面標高はおよそ102.9m）。底面標高はおよそ103.2m付近を測る。

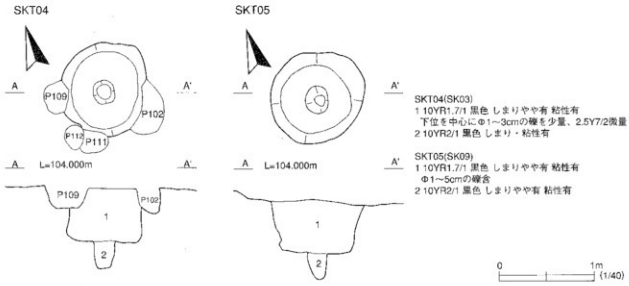
遺　物

出土しなかった。

ＳＫＴ05陥し穴状遺構（ＳＫ09）

遺　構（第９図、写真図版３）

＜位置・検出状況＞調査区中央、ＶＤ１ａグリッドに位置する。検出面は標高103.6m付近のⅥ層上面である。重複する遺構はない。北約2.9mにＳＫＴ03、南南東約4.0mにＳＤ12が位置する。
＜平面形・規模＞開口部径103×95cmの円形を呈する。深さは55cmを測る。壁は外傾している。底部径71×71cmを測る。
＜埋土＞Ⅴ層起源の黒色土を主体とした自然堆積を呈し、２層に分けられる。



第９図　ＳＫＴ04・05陥し穴状遺構

＜底面＞概ね平坦である。中央付近に径28×23cmの楕円形状を呈し、深さ28cmを測るピット１基を検出した（ピットの底面標高はおよそ102.8m付近）。標高は103.1～103.2mを測る。

遺　物

出土しなかった。

3　古代・近世以降の遺構

（1）竪穴状遺構

ＳＫＩ03竪穴状遺構

遺　構（第10図、写真図版４）

＜位置・検出状況＞調査区中央、ＶＤ３ｂ・３ｃ・４ｂ・４ｃグリッドに位置する。検出面はおよそ標高103.6～103.7mのⅣ層上面で、底面に向かうにつれてⅥ層に移行する。北約0.6mにＳＫ08、南約0.3mにＳＤ01、北西約3.7mにＳＤ13が位置する。

＜重複関係＞ＳＤ05に切られている。

＜平面形・規模＞東側が調査区外のため平面形・規模ははっきりしない。北壁は4.59m、南壁は3.17m残存し、西壁は3.9m遺存していることから、4.6×4.0mの隅丸長方形状を呈するものと思われる。

床面は南側2/5は比高差７cm程の段差をもって床面がテラス状に高まる。北側3/5は中心部が丸底風に窪んでいる（標高は103.2m前後）。南側2/5概ね平坦である。南側2/5を張り出し・テラス状のものとして捉えた場合は、本体部が長軸4.20m、短軸2.84mの隅丸長方形状を呈し、張り出し部は長軸3.54m、短軸100cmの長方形状を呈する（標高は103.3m付近）。

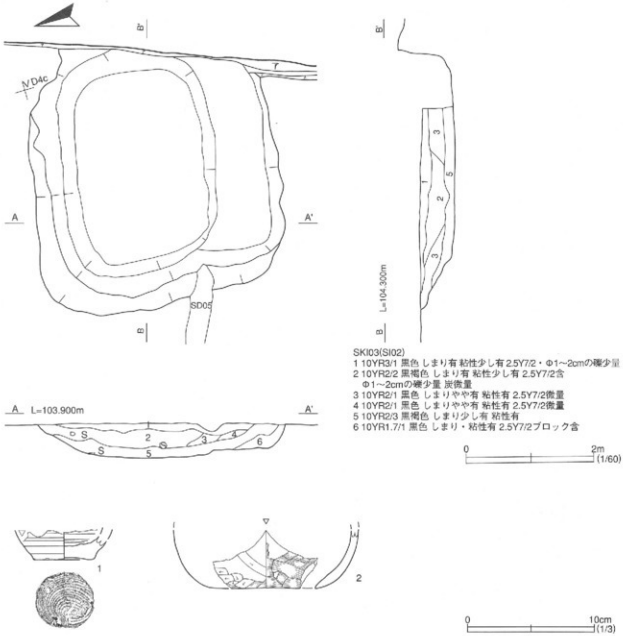
＜主軸方向・床面積＞西壁を基準とした主軸方向はＮ－２°－Ｅ、床面積は10.22㎡を測る。

＜埋土＞黒色土を主体とした自然堆積を呈し、６層に細分される。

＜壁＞外傾して立ち上がる。壁高は北壁18cm、南壁38cm、西壁49cmを測る。

遺　物（第10図、写真図版13）

検出面・埋土から土器（土師器・須恵器・灯明皿）118ｇが出土した。このうち１の須恵器小型壺と２のほうろく？を掲載した。



第10図　ＳＫＩ03竪穴状遺構、同出土遺物

（2）井　戸　跡

ＳＥ01井戸跡

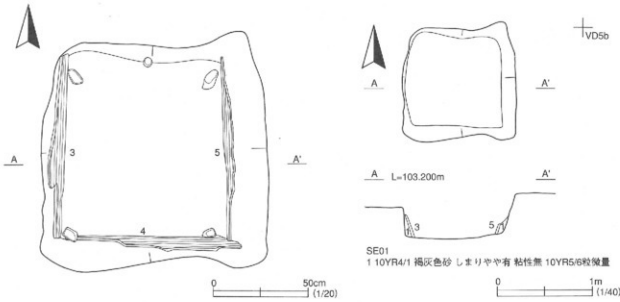
遺　構（第11図、写真図版４）

＜位置・検出状況＞調査区南、ＶＤ５ａグリッドに位置する。検出面は標高102.9～103.0ｍのⅥ層上面である。ＳＤ01Ａの底面精査中に褐灰色土のプランを検出した。

＜重複関係＞ＳＤ01Ａに切られている。

＜平面形・規模＞平面形・規模は隅丸方形状を呈し、開口部1.21×1.16ｍ、底部1.04×0.95ｍを測る。

＜壁＞壁は外傾している。深さ32～42㎝を測る。



第11図　ＳＥ01井戸跡

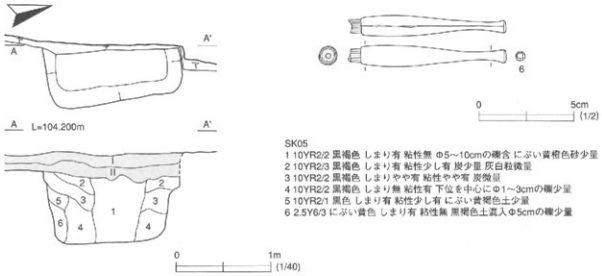
＜底面＞概ね平坦である。各コーナーから中央に向かって内側５～20㎝程内側と北壁中央壁際の計５箇所に10～20㎝の杭が刺さっている。杭は井戸枠を構成する板をおさえるためのものと思われる。板は概ね長さ94～96㎝、幅20㎝程の大きさのもので、一部に工具痕がみとめられる。井戸枠の範囲は92×84㎝の方形状を呈する。底面標高は102.6m付近を測る。

遺　物（写真図版13）

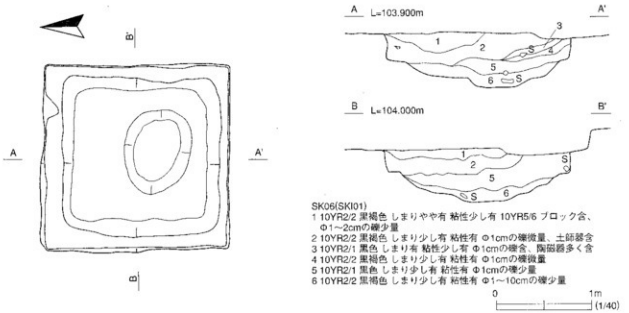
土器等の遺物は出土しなかったが、３～５の井戸枠の側板を写真掲載した。

（３）土　　坑

調査区中央付近を中心に土坑は４基検出した。平面形は方形・隅丸方形状とさまざまである。人為的に埋め戻されている傾向がある。中には近世陶磁器を多く出土した土坑もある（ＳＫ07・08）。これらの土坑は出土遺物が破損した近世陶磁器が多いことと堆積状況から、近世のゴミ穴の可能性が高い。



第12図　ＳＫ05土坑、同出土遺物



第13図　ＳＫ06土坑

ＳＫ05土坑

遺　構（第12図、写真図版５）

＜位置・検出状況＞調査区中央、ＶＣ３ｉグリッドに位置する。検出面は標高103.7ｍ付近のⅥ層上面である。重複する遺構はない。南約0.1ｍにＳＤ05が位置する。

＜平面形・規模＞西側が調査区外に延びているためにはっきりしない。長軸140cm遺存、短軸56cm残存していることから一辺が1.4ｍ前後の方形状を呈するものと思われる。深さは69cmを測る。壁は直立気味に立ち上がる。底部は長軸116cm遺存、短軸39cm残存している。

＜埋土＞黒褐色土を主体とした人為堆積を呈し、６層に細分した。堆積状況を見てみると１層は自然堆積、２～６層が人為堆積である。堆積状況が墓壙の堆積に類似し、１層中から煙管の吸口が出土していることから、墓壙の可能性もあると思われる。なお、人骨・毛髪等は確認されなかった。

＜底面＞概ね平坦である。底面標高は103.0ｍ付近を測る。

遺　物（第12図、写真図版13）

埋土から陶磁器１ｇ、煙管１点（10.19ｇ）が出土した。このうち６の煙管吸口を掲載した。形状から見て所属時期は18世紀末～19世紀前半代であると思われる。

ＳＫ06土坑（ＳＫＩ01）

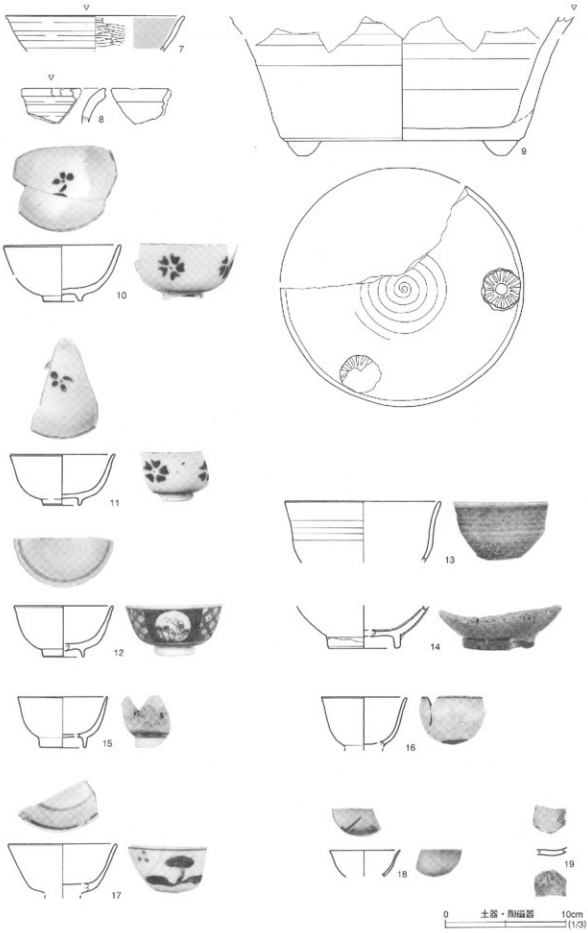
遺　構（第13図、写真図版５）

＜位置・検出状況＞調査区中央、ＶＤ１ｃグリッドに位置する。検出面は標高103.7ｍ付近のⅥ層上面である。重複する遺構はない。北約4.3ｍにＳＫ07、南南西約2.4ｍにＳＤ14が位置する。

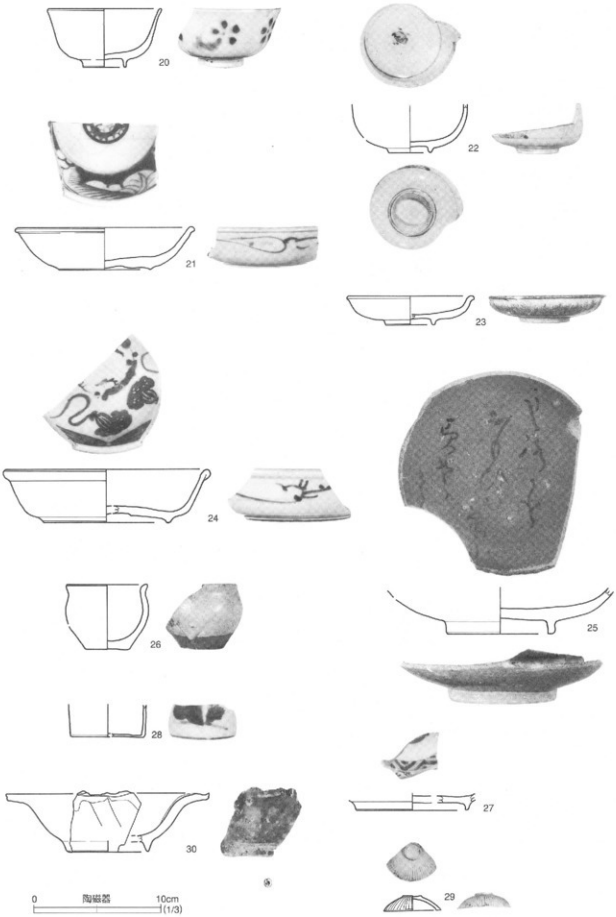
＜平面形・規模＞開口部は東西方向約1.99ｍ、南北方向1.95ｍの方形状を呈する。深さ58cmを測る。壁は上位は直立、下位は外傾している。底部は東西方向1.95ｍ、南北方向1.90ｍを測る。

＜埋土＞黒褐色土を主体とした人為堆積を呈し、６層に細分される。上位（２層）からは土師器が、下位（６層）からは近世陶磁器が多く出土した。

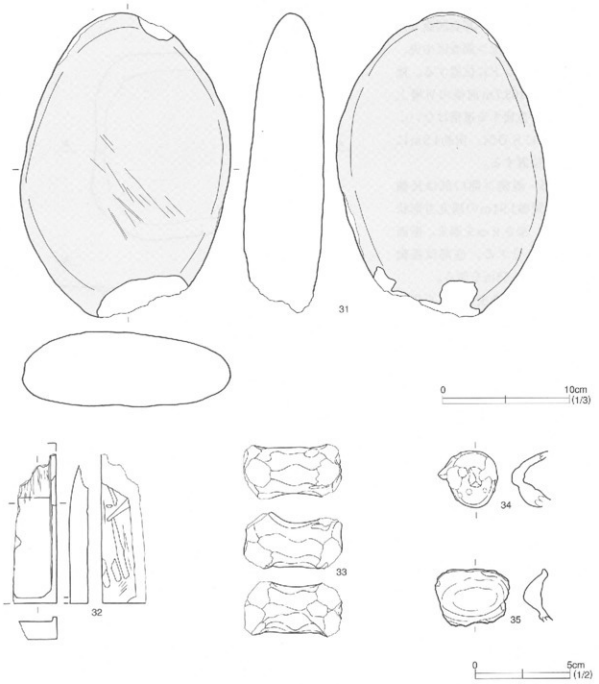
＜底面＞丸底状を呈する。中央付近に径92×70cmの楕円形状を呈し、深さ７cmを測るピット１基が検



第14図　ＳＫ06土坑出土遺物（１）



第15図　ＳＫ06土坑出土遺物（２）



第16図　ＳＫ06土坑出土遺物（３）

出された（ピットの底面標高は103.2m前後）。標高は103.3m前後を測る。

遺　物（第14～16図、写真図版13・14）

埋土から土師器1,114ｇ、須恵器片79ｇ、陶磁器1,634ｇ、石製品3,181ｇ、土製品50ｇ出土した。傾向としては土師器・須恵器は１・２層から、陶磁器は５・６層から出土した。

このうち７の土師器坏Ａ１、８の土師器甕ＩＡ、９の火鉢、10～17の陶磁器碗、18の陶磁器小碗、21～25・27の陶磁器皿、26の陶磁器壺、28の陶磁器猪口、29の陶磁器蓋、30の陶磁器鉢、31の磨石、32の硯、33の土製人形、19・34・35の面撰（泥面子）を掲載した。10・11の陶磁器碗は瀬戸産、21・22・24・27の陶磁器皿と26の陶磁器壺、28の陶磁器猪口は肥前産であると思われる。

ＳＫ07土坑（ＳＫＩ02）

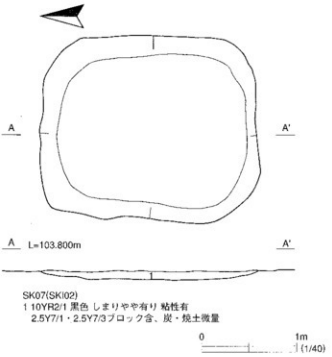
遺　構（第17図、写真図版５）

＜位置・検出状況＞調査区中央、ⅣＤ10ｃグリッドに位置する。検出面は標高103.7ｍ前後のⅥ層上面である。重複する遺構はない。北約0.1ｍにＳＤ04、南約4.3ｍにＳＫ06が位置する。

＜平面形・規模＞開口部は長軸2.30ｍ、短軸1.94ｍの隅丸方形状を呈する。深さ９㎝を測る。断面形は皿状を呈する。底部は長軸2.00ｍ、短軸1.55ｍを測る。

＜埋土＞黒色土を主体とした単層の人為堆積を呈する。Ⅵ層起源の灰白ブロックを含む。また近世陶磁器が多く出土した。

＜底面＞浅い丸底状を呈する。底面標高は103.2～103.3ｍを測る。



第17図　ＳＫ07土坑

遺　物（第18図、写真図版14）

埋土から土師器26ｇ、陶磁器599ｇ出土した。このうち36の土師器甕、37～42・44の陶磁器碗、43・45～47の陶磁器皿、48の急須を掲載した。なお、38・40・43・44の陶磁器は瀬戸産、39・46の陶磁器は肥前産であると思われる。

ＳＫ08土坑

遺　構（第19図、写真図版５）

＜位置・検出状況＞調査区中央、ＶＤ３ｃ・３ｄグリッドに位置する。検出面は標高103.7ｍ前後のⅥ層上面である。重複する遺構はない。北北東約2.8ｍにＳＤ14、東約5.4ｍにＳＤ13、南約0.6ｍにＳＫＩ03が位置する。

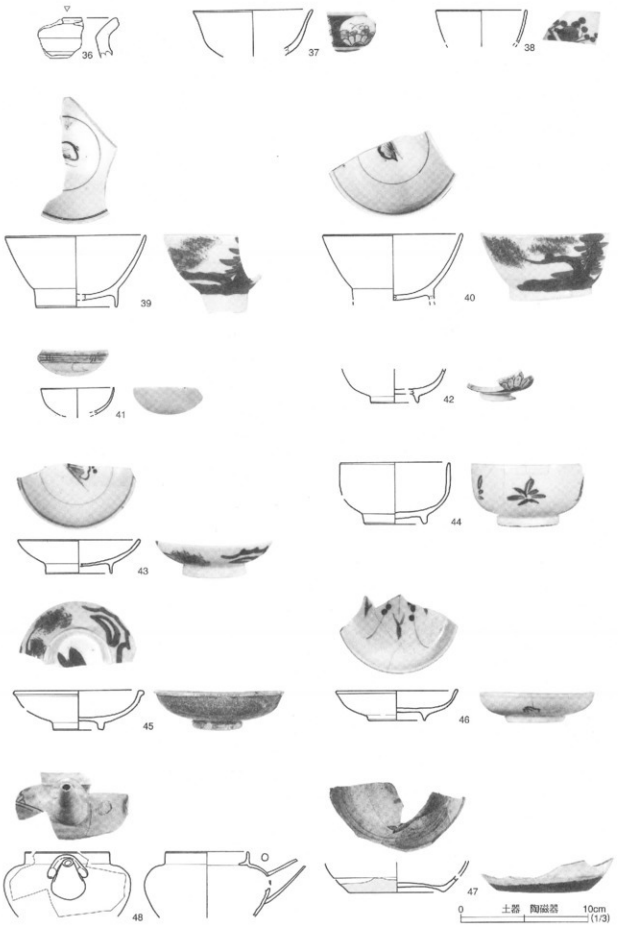
＜平面形・規模＞開口部は長軸1.71ｍ、短軸1.20ｍの隅丸長方形状を呈する。深さは37㎝を測る。壁は外傾している。底部は長軸1.18ｍ、短軸0.69ｍを測る。

＜埋土＞にぶい黄褐色土（３・５層）と黒色（１層）・黒褐色土（４層）が互層に入る人為堆積を呈し、５層に細分される。

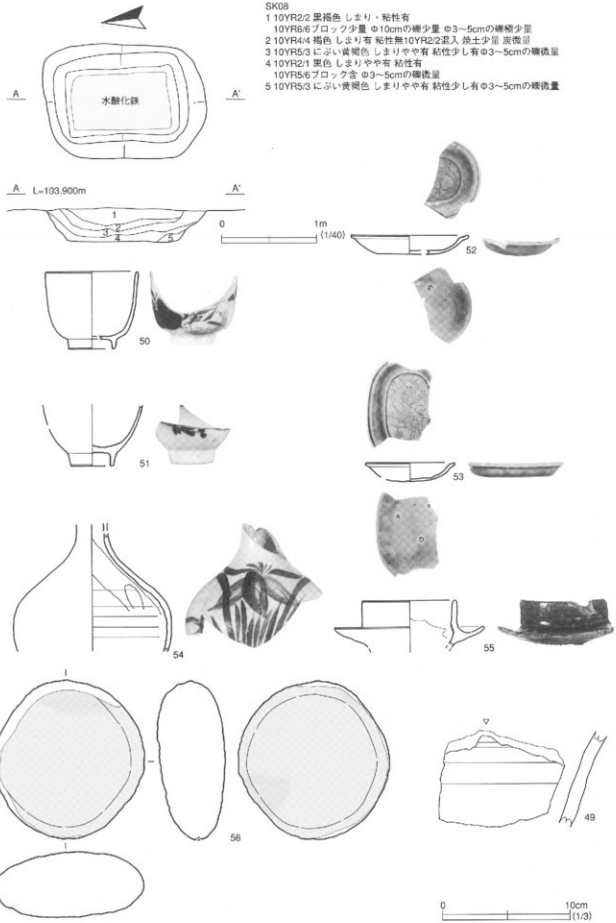
＜底面＞概ね平坦である。底部中央付近を中心に水酸化鉄が長方形状に長軸103㎝、短軸59㎝の範囲に広がっている。標高は103.35ｍを測る。

遺　物（第19図、写真図版14）

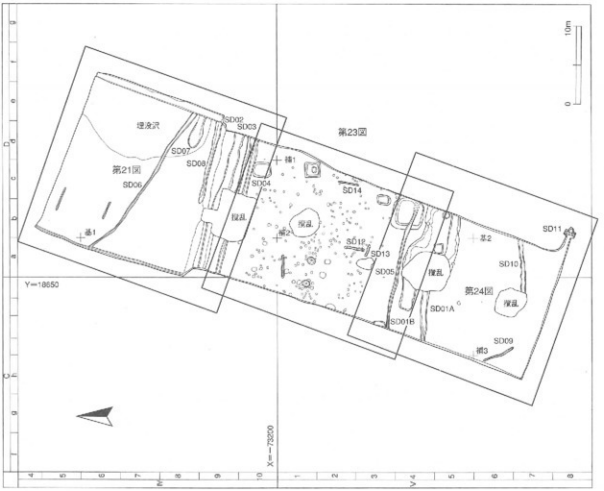
埋土から土師器213ｇ、陶磁器387ｇ、石製品930ｇ出土した。このうち49の火鉢、50・51の瀬戸産陶磁器碗、52・53の小皿、54の瓶、55の灯明皿、56の磨石を掲載した。



第18図　ＳＫ07土坑出土遺物



第19図　ＳＫ08土坑、同出土遺物



第20図　溝跡図面（第21・23・24図）割付図

（4）溝　　跡

溝跡は調査区各地から15条検出した。調査区の制約から全長は不明だが、幅30～50cmで、埋土が黒色～黒褐色土系のものが多い傾向がある。深さは削平が著しく傾向は見いだせなかった。軸方向のほとんどが調査区に対して直交もしくは平行しており、前者が10条、後者が3条を占める。遺物が出土していないため時期不明であるが、ＳＤ06は状況からみて古代の可能性がある。

ＳＤ01Ａ溝跡

遺　構（第24・25図、写真図版６・７）

＜位置・検出状況＞調査区南、ＶＣ４ｉ・４ｊ、ＶＤ４ａ・５ａ・４ｂ・５ｂグリッドに位置する。検出面は標高103.6～103.7mのⅢ層上面で、底面に向かうにつれてⅥ層に移行しており、壁面中位より下はⅥ層面を掘りこんでいる。北約0.4mにＳＤ05、北約0.1mにＳＫＩ03、南約7.3mにＳＤ10、南西約10.5mにＳＤ09が位置する。

＜重複関係＞ＳＥ01を切っている。位置的にＳＤ01Ｂと重複関係にあったと思われるが、重複部分が撹乱によって消失しているため、新旧関係は不明。一連の溝の可能性もあるため、便宜的にＳＤ01のＡ・Ｂと連番扱いにした。

＜規模・形状＞東西ともに調査区外に延びているために全容は不明。確認された部分では総長16.7m、幅0.55～4.76mを測る。横断面形は半円状を呈し、深さは11～47cmを測る。

＜方向＞方向は西北西－東南東方向（Ｅ－10°－Ｓ）である。

＜埋土＞２層に細分した。１層は黒褐色土主体の自然堆積、２層は褐灰色砂の水成堆積層である。
＜底面＞概ね平坦である。標高は103.14～103.60m、高低差46cmを測り、東に向かうにつれて低くなっていく。
＜杭列＞南壁際に径10～15cm、深さ10～24cmほどの杭列が認められる。調査時の不手際で図化しそこねたが、もう一つの杭列がＰ２から、前述の杭列に直交するようにあった（写真図版７）。

遺　物（第26図、写真図版14）

埋土から土師器26ｇ、陶磁器120ｇ、土製品８ｇ、ガラス片13ｇ出土した。このうち57の陶磁器碗（大堀相馬？）、58の陶磁器皿、59の擂鉢、60の面擦（泥面子）を掲載した。

ＳＤ01Ｂ溝跡

遺　構（第24・25図、写真図版６）

＜位置・検出状況＞調査区南、ＶＣ４ｉ・４ｊ、ＶＤ４ａ・５ａ・４ｂ・５ｂグリッドに位置する。検出面は標高約103.7m付近のⅢ層上面で、底面に向かうにつれてⅥ層に移行しており、壁面中位より下はⅥ層面を掘りこんでいる。北約0.4mにＳＤ05、北約0.1mにＳＫＩ03、南約7.3mにＳＤ10、南西約10.5mにＳＤ09が位置する。
＜重複関係＞位置的にＳＤ01Ａと重複関係にあったと思われるが、重複部分が攪乱によって消失しているため、新旧関係は不明。一連の溝である可能性もあるので、便宜的にＳＤ01のＡ・Ｂと連番扱いにした。
＜規模・形状＞西側は調査区外に延び、東側は攪乱に切られている全容は不明。確認された部分では総長3.25m、幅1.6～1.7mを測る。横断面形は逆台形状を呈し、深さは８～15cmを測る。
＜方向＞方向は西北西－東南東方向（Ｅ－12°－Ｓ）である。
＜埋土＞黒色土主体の自然堆積を呈し、３層に細分される。
＜底面＞概ね平坦である。標高は103.54～103.62m、高低差８cmを測り、東に向かうにつれて低くなっていく。

遺　物

埋土から土師器が48ｇ、陶磁器11ｇ出土した。

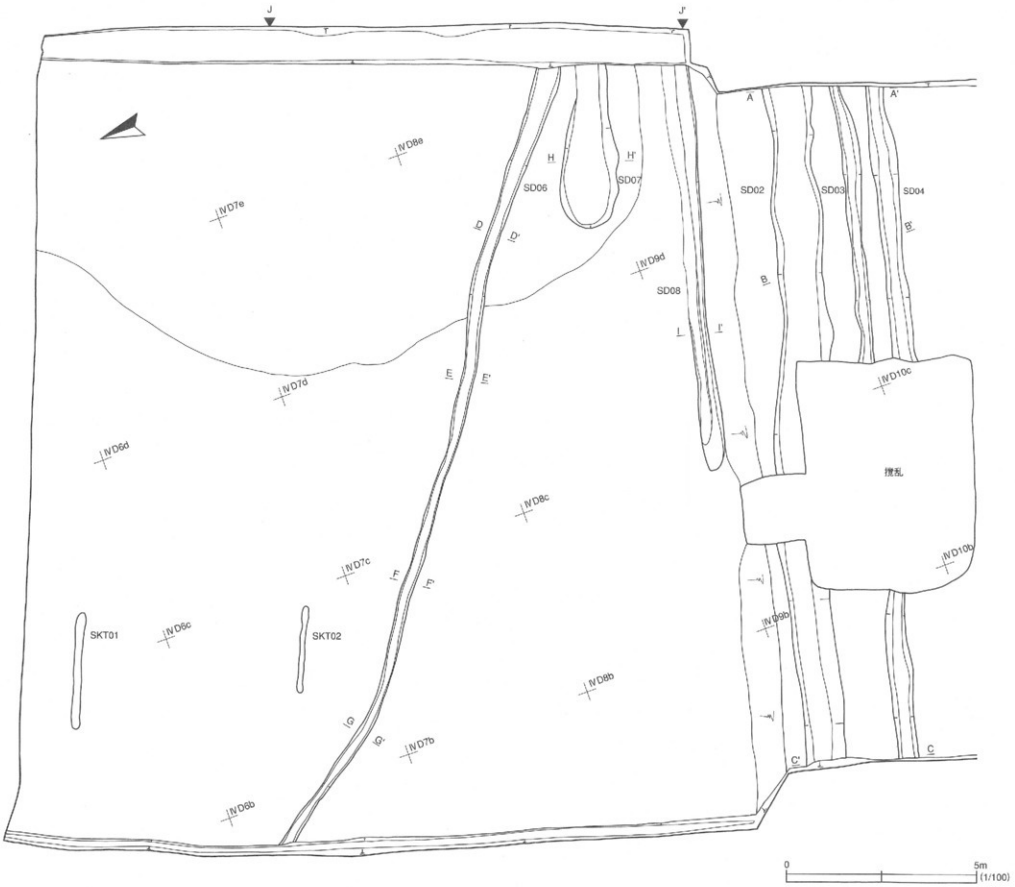
ＳＤ02溝跡

遺　構（第21・22図、写真図版７）

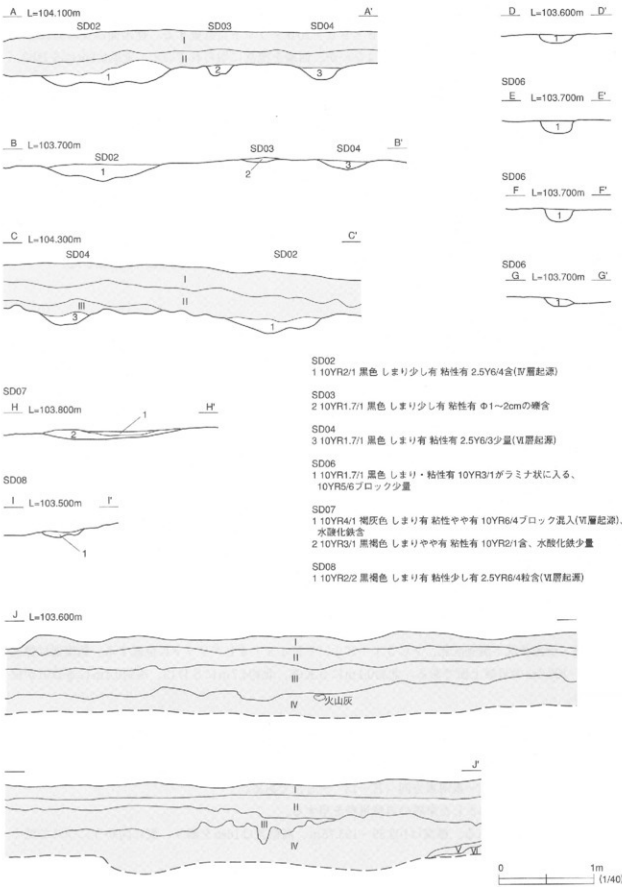
＜位置・検出状況＞調査区北、ⅣＤ９ａ～９ｄグリッドに位置する。検出面は標高約103.5m付近のⅥ層上面である。重複する遺構はないが、中央付近を攪乱に切られている。北約1.4mにＳＤ08、南約0.4mにＳＤ03が位置する。
＜規模・形状＞東西ともに調査区外に延びているために全容は不明。確認された部分では総長17.90m、幅1.03～1.34mを測る。横断面形は逆二等辺三角形状を呈し、深さは８～19cmを測る。
＜方向＞方向は西北西－東南東方向（Ｅ－16°－Ｓ）である。
＜埋土＞黒色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。
＜底面＞凸凹に富む。標高は103.31～103.39m、高低差は８cmを測り、西に向かうにつれて低くなっていく。

遺　物

埋土から土師器が19ｇ出土した。



第21図　ＳＤ02～04・06～08溝跡、埋没沢（１）



SD02
1 10YR2/1 黒色 しまり少し有 粘性有 2.5Y6/4含(Ⅳ層起源)

SD03
2 10YR1.7/1 黒色 しまり少し有 粘性有 Φ1～2cmの礫含

SD04
3 10YR1.7/1 黒色 しまり有 粘性有 2.5Y6/3少量(Ⅵ層起源)

SD06
1 10YR1.7/1 黒色 しまり・粘性有 10YR3/1がラミナ状に入る、
10YR5/6ブロック少量

SD07
1 10YR4/1 褐灰色 しまり有 粘性やや有 10YR6/4ブロック混入(Ⅵ層起源)、
水酸化鉄含
2 10YR3/1 黒褐色 しまりやや有 粘性有 10YR2/1含、水酸化鉄少量

SD08
1 10YR2/2 黒褐色 しまり有 粘性少し有 2.5YR6/4粒含(Ⅵ層起源)

第22図　ＳＤ02～04・06～08溝跡、埋没沢（２）

ＳＤ03溝跡

遺　構（第21・22図、写真図版７）

＜位置・検出状況＞調査区北、ⅣＤ９ｃ・９ｄ・10ｄグリッドに位置する。検出面は標高約103.6m付近のⅥ層上面である。重複する遺構はないが、西端を攪乱に切られている。北約0.4mにＳＤ02、南約0.2mにＳＤ04が位置する。

＜規模・形状＞西側は攪乱に切られ、東側は調査区外に延びているために全容は不明。確認された部分では総長7.43m、幅0.27～0.35mを測る。横断面形は逆台形状を呈し、深さは３～９cmを測る。

＜方向＞方向は西北西－東南東方向（Ｅ－14°－Ｓ）である。

＜埋土＞黒色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞凸凹に富む。標高は103.47～103.56m、高低差は９cmを測り、東に向かうにつれて低くなっていく。

遺　物（第26図、写真図版14）

埋土から土師器が150ｇ、陶磁器が11ｇ出土した。このうち61の須恵器大甕片を掲載した。

ＳＤ04溝跡

遺　構（第21・22図、写真図版７）

＜位置・検出状況＞調査区北、ⅣＤ９ａ・９ｂ・10ｃ・10ｄグリッドに位置する。検出面は標高約103.5m付近のⅥ層上面である。重複する遺構はないが、中央付近を攪乱に切られている。北約0.2mにＳＤ03、南約0.1mにＳＫ07、南約7.2mにＳＫＴ03が位置する。

＜規模・形状＞東西ともに調査区外に延びているために全容は不明。確認された部分では総長17.80m、幅0.43～0.55mを測る。横断面形は逆台形状を呈し、深さは９～10cmを測る。

＜方向＞方向は西北西－東南東方向（Ｅ－17°－Ｓ）である。

＜埋土＞黒色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞若干凸凹である。標高は103.45～103.47m、高低差は僅かに２cmを測るのみである。

遺　物

埋土から土師器が13ｇ出土した。

ＳＤ05溝跡

遺　構（第24・25図、写真図版８）

＜位置・検出状況＞調査区北、ＶＣ３ｉ・３ｊ、ＶＤ４ａ・４ｂグリッドに位置する。検出面は標高103.7～103.8mのⅥ層上面である。北約0.1mにＳＫ05、北約4.7mにＳＤ13、南約0.4mにＳＤ01が位置する。

＜重複関係＞ＳＫＩ03を切っている。

＜規模・形状＞東西ともに調査区外に延びているために全容は不明。確認された部分では総長16.63m、幅0.3～0.36mを測る。横断面形は半円状を呈し、深さは５～11cmを測る。

＜方向＞方向は西北西－東南東方向（Ｅ－13°－Ｓ）である。

＜埋土＞黒色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞概ね平坦である。標高は103.59～103.75m、高低差は16cmを測り、東に向かうにつれて低くなっていく。

遺　物
出土しなかった。

ＳＤ06溝跡
遺　構（第21・22図、写真図版９）
＜位置・検出状況＞調査区北、ⅣＤ６ｂ・７ｃ・８ｄ・８ｅグリッドに位置する。検出面は標高103.1～103.2ｍのⅥ層上面である。重複する遺構はない。北約2.3ｍにＳＫＴ02、南約0.4ｍにＳＤ07が位置する。
＜規模・形状＞東西ともに調査区外に延びているために全容は不明。確認された部分では総長21.75ｍ、幅0.3～0.36ｍを測る。横断面形はＵ字溝状を呈し、深さは５～10㎝を測る。
＜方向＞方向は北西－南東方向（Ｅ－38°－Ｓ）である。
＜埋土＞黒色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。
＜底面＞概ね平坦である。標高は103.05～103.10ｍ、高低差は５㎝を測り、東に向かうにつれて低くなっていく。
遺　物
埋土から土師器が５ｇ、陶磁器が１ｇ出土した。

ＳＤ07溝跡
遺　構（第21・22図）
＜位置・検出状況＞調査区北、ⅣＤ８ｄグリッドに位置する。開山時の創平で検出面の標高は約103.1ｍ付近と同じであるが層位は異なっており、東半部はⅣ層上面、西半部はⅥ層上面である。Ⅳ層起源と思われる黒褐色土の溝状プランとして検出した。重複する遺構はない。北約2.3ｍにＳＫＴ02、南約0.4ｍにＳＤ08が位置する。
＜規模・形状＞東側が調査区外に延びているために全容は不明。確認された部分では総長4.3ｍ、幅0.8～1.54ｍを測る。横断面形は皿状を呈し、深さは２～５㎝を測る。
＜方向＞方向は西北西－南南東方向（Ｅ－18°－Ｓ）である。
＜埋土＞１層は褐灰色土主体の人為堆積、２層は黒褐色土を主体とした自然堆積を呈し、２層に細分される。１層はⅠ層の可能性もある。
＜底面＞概ね平坦である。標高は103.10ｍを測り、高低差はほとんどない。
遺　物
埋土から土師器が３ｇ出土した。

ＳＤ08溝跡
遺　構（第21・22図、写真図版８）
＜位置・検出状況＞調査区北、ⅣＤ９ｃ・９ｄグリッドに位置する。検出面は標高103.2ｍ前後のⅥ層上面である。重複する遺構はない。北約0.4ｍにＳＤ07、南約1.4ｍにＳＤ02が位置する。
＜規模・形状＞東側が調査区外に延びているために全容は不明。確認された部分では総長10.80ｍ、幅0.42～0.71ｍを測る。横断面形は逆台形状を呈し、深さは４㎝を測る。
＜方向＞方向は西北西－東南東方向（Ｅ－15°－Ｓ）である。
＜埋土＞黒色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞凹凸に富む。標高は103.14～103.18m、高低差は4㎝を測り、東方向に向かうにつれて低くなっていく。

遺　物

出土しなかった。

ＳＤ09溝跡

遺　構（第24・25図、写真図版10）

＜位置・検出状況＞調査区南、ＶＣ６ｈ・６ｉグリッドに位置する。検出面は標高約103.7m付近のⅢ層上面である。重複する遺構はない。東約７mにＳＤ10、北東約10.5mにＳＤ01が位置する。

＜規模・形状＞総長4.16m、幅0.22～0.24mを測る。横断面形は半円状を呈し、深さは１～９㎝を測る。

＜方向＞北北西－南南東方向（Ｎ－23°－Ｗ）である。

＜埋土＞黒色土主体の単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞若干凹凸である。標高は103.63～103.74m、高低差は11㎝を測り、南方向に向かうにつれて低くなっていく。

遺　物

出土しなかった。

ＳＤ10溝跡

遺　構（第24・25図、写真図版10）

＜位置・検出状況＞調査区南、ＶＣ７ｊ・ＶＤ７ａグリッドに位置する。検出面は標高103.68m前後のⅢ層上面である。重複する遺構はないが、西側を撹乱に切られている。北約7.3mにＳＤ01、南東約5.6mにＳＤ11、西約７mにＳＤ09が位置する。

＜規模・形状＞西側が撹乱で、東側は調査区外に延びているために全容は不明。確認された部分では総長6.54m、幅0.47～0.54mを測る。横断面形は半円状を呈し、深さは３～６㎝を測る。

＜方向＞方向は東西方向（Ｅ－３°－Ｎ）である。

＜埋土＞黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞若干凹凸である。標高は103.61～103.65m、高低差は４㎝を測り、東方向に向かうにつれて低くなっていく。

遺　物

埋土から陶磁器が１ｇ出土した。

ＳＤ11溝跡

遺　構（第24・25図、写真図版10）

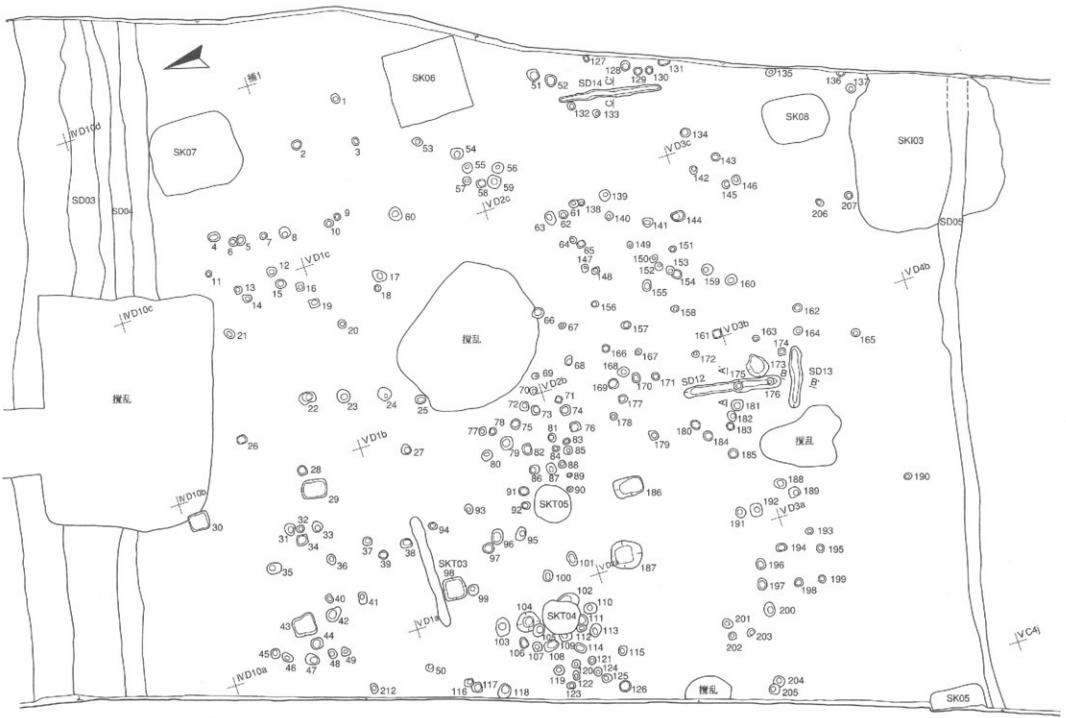
＜位置・検出状況＞調査区南、ＶＤ８ｂグリッドに位置する。検出面は標高103.5～103.6mのⅢ層上面である。重複する遺構はない。北西約5.6mにＳＤ10が位置する。

＜規模・形状＞南北ともに調査区外に延びているために全容は不明。確認された部分では総長1.16m、幅0.23～0.39mを測る。横断面形は逆台形状を呈し、深さは５～14㎝を測る。

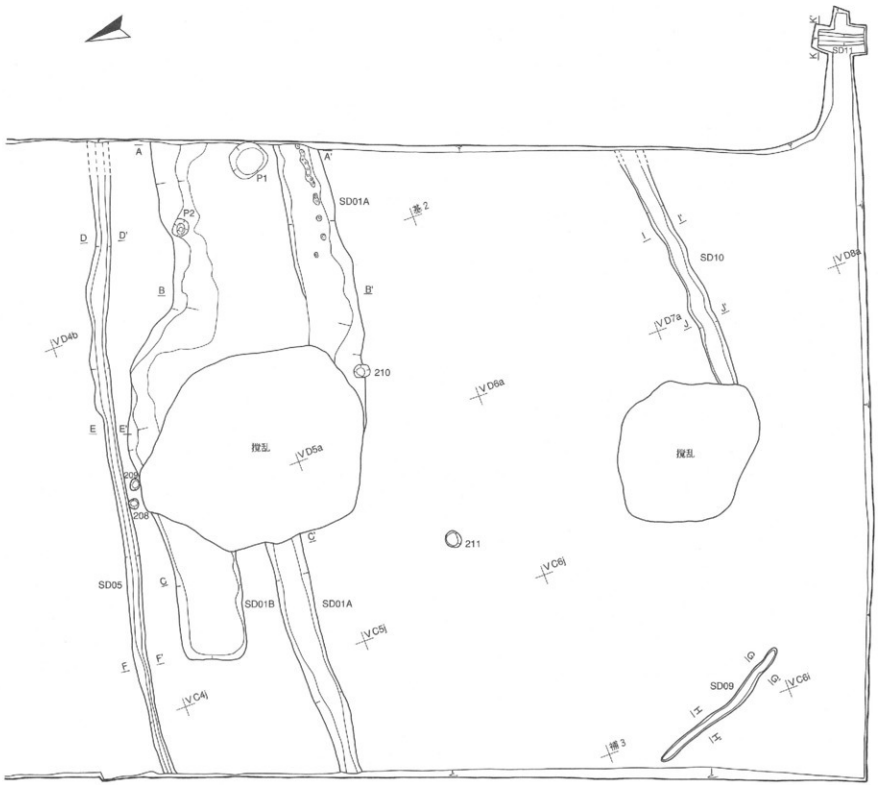
＜方向＞方向は北北東－南南西方向（Ｎ－21°－Ｅ）である。

＜埋土＞黒色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。

＜底面＞若干凹凸である。標高は103.53mである。高低差はほとんどない。

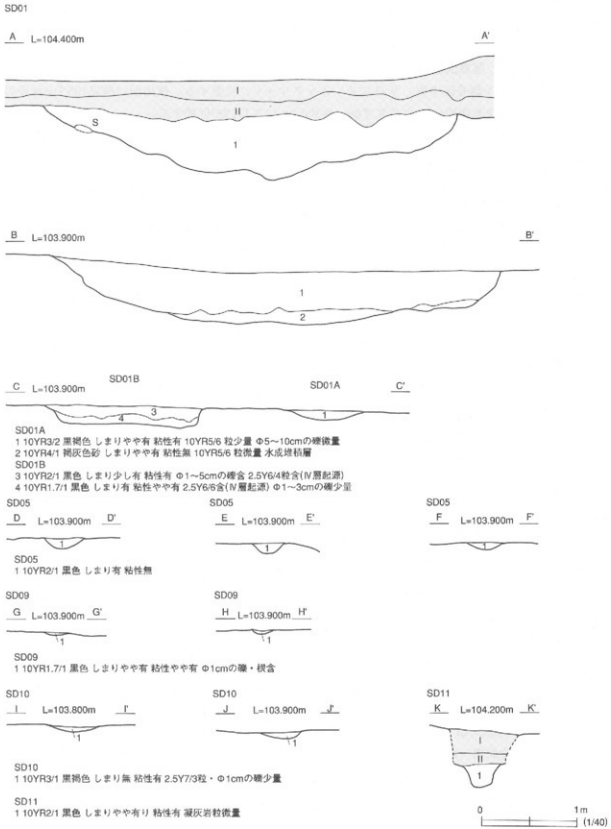


第23図　ＳＤ12～14溝跡、柱穴状土坑（１）



0　5m
(1/100)

第24図　ＳＤ01Ａ・Ｂ・05・09～11溝跡（１）、柱穴状土坑（２）



第25図　ＳＤ01Ａ・Ｂ・05・09～11溝跡（２）

遺　物
出土しなかった。

ＳＤ12溝跡

遺　構（第23図、写真図版10）
＜位置・検出状況＞調査区中央、ＶＤ２ａ・３ａグリッドに位置する。検出面は標高103.7m付近のⅥ層上面である。北北西約4.0mにＳＫＴ05、南約0.2mにＳＤ13が位置する。
＜重複関係＞Ｐ175・176に切られている。
＜規模・形状＞総長2.59m、幅22～35cmを測る。横断面形は逆台形状を呈し、深さは３～12cmを測る。
＜方向＞方向は北北東－南南西方向（Ｎ－10°－Ｅ）である。
＜埋土＞黒褐色土主体の単層の自然体積を呈する。
＜底面＞概ね平坦である。標高は103.66～103.68m、高低差は２cmを測り、南に向かうにつれて低くなっていく。

遺　物
埋土から土師器が16ｇ出土した。

ＳＤ13溝跡

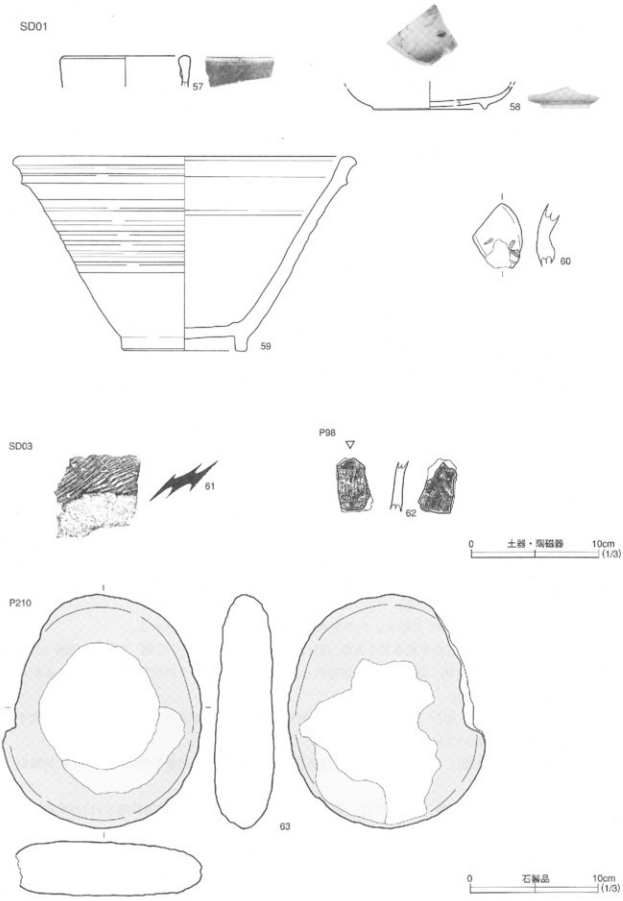
遺　構（第23図、写真図版11）
＜位置・検出状況＞調査区中央、ＶＤ２ａ・３ａグリッドに位置する。検出面は標高103.7m付近のⅥ層上面である。重複する遺構はない。北約0.2mにＳＤ12、東約5.4mにＳＫ08、南東約3.7mにＳＫＩ03、南約4.7mにＳＤ05が位置する。
＜規模・形状＞総長1.57m、幅27～33cmを測る。横断面形は半円状を呈し、深さは１～４cmを測る。
＜方向＞方向は東南東方向（Ｅ－17°－Ｓ）である。
＜埋土＞黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。
＜底面＞概ね平坦である。標高は103.69～103.75m、高低差は６cmを測り、西に向かうにつれて低くなっていく。

遺　物
埋土から須恵器が８ｇ出土した。

ＳＤ14溝跡

遺　構（第23図、写真図版11）
＜位置・検出状況＞調査区中央、ＶＤ２ｃ・３ｃグリッドに位置する。検出面は標高103.7m付近のⅥ層上面である。重複する遺構はない。北北東約2.4mにＳＫ06、南南西約2.8mにＳＫ08が位置する。
＜規模・形状＞総長2.7m、幅13～23cmを測る。横断面形は半円状を呈し、深さは２～５cmを測る。
＜方向＞方向は北北東－南南西方向（Ｎ－10°－Ｅ）である。
＜埋土＞黒褐色土を主体とした単層の自然堆積を呈する。
＜底面＞概ね平坦である。標高は103.66～103.71m、高低差は５cmを測り、南に向かうにつれて深くなっていく。

遺　物
出土しなかった。



第26図　ＳＤ01・03溝跡・柱穴状土坑出土遺物

（5）柱穴状土坑

遺　構（第23・24図、第1表）

調査区で検出された柱穴は212個を数え、調査区中央を中心に検出された。調査区南部では若干検出したが、北部では検出されていない。平面形は円形・楕円形・方形・隅丸方形・隅丸長方形などがあり、規模は13～80cm、深さは4～80cmを測る。掘り方をもった柱穴や、掘立柱建物跡を構成する柱穴は確認されていない。埋土は黒色土～黒褐色土主体の自然堆積を呈している。

これらの柱穴からは確実に遺構に伴うと思われる遺物は出土しなかった。そのため、所属時期は不明であるが、埋土の特徴が時期不明の溝跡と類似していることや、重複関係の中で一番新しい遺構であることから、近世末以降の屋敷跡に伴う柱穴の可能性が高い。

遺　物（第26図、写真図版14）

P34埋土から土師器11ｇ、P41埋土から土師器5ｇ、P58埋土から土師器3ｇ、P91埋土から土師器2ｇ、P98埋土から土師器4ｇ・土製品1ｇ、P103埋土から土師器3ｇ、P112埋土から4ｇ、P158埋土から土師器44ｇ、P159埋土から土師器6ｇ、P160埋土から土師器10ｇ、P165埋土から土師器1ｇ、P185埋土から土師器13ｇ、P210埋土から石製品1,567ｇ出土した。このうちP98から出土した62の面擦（泥面子）とP210から出土した63の磨石を掲載した。62は18世紀後半～19世紀前半代であると思われる。

遺構外出土遺物（第27～29図、写真図版15）

試掘・粗掘・検出時に調査区各地から縄文土器2点、土師器3,740ｇ、須恵器382ｇ、陶磁器1,058ｇ、ガラス23ｇが出土した。

土師器・須恵器は調査区北から、陶磁器・ガラスは調査区中央～南から出土している傾向が認められる。

＜縄文土器＞64・65は深鉢の体部破片である。木目状撚糸文が施文されている。大木6～7ａ式か？。

＜土師器坏＞器形の分かるものを見るとＡ2類（69）、Ｂ1類（66）、Ｂ2類（67・68・70・71）が認められ、Ｂ2類が多い。71～77は底部破片である。底面再調整が施されたものも含まれているが、回転糸切り無調整が主体を占めている。

＜土師器高台坏＞直線的なもの（78）と、ハの字状に開くもの（80）が認められる。

＜土師器甕＞器形の分かるものを見るとＩＡ類（81）、ＩＢ類（84・87）、ＩＣ類（94）、ＩＤ類（82・85）、ＩＥ類（83）、Ⅱ類（86・88～93・95）が認められ、ロクロ・非ロクロ成形が混在しているが、非ロクロ成形のⅡ類が多い。

＜須恵器＞甕（96）・大甕（97～101・102）・壺（101）がある。大甕のタタキメは木目に対して直交する溝を入れたものでたたいている。

＜陶器＞：ほうろく（103）、瓶（104）、擂鉢（105）がある。103は18世紀前半代のものに比較的類似している。

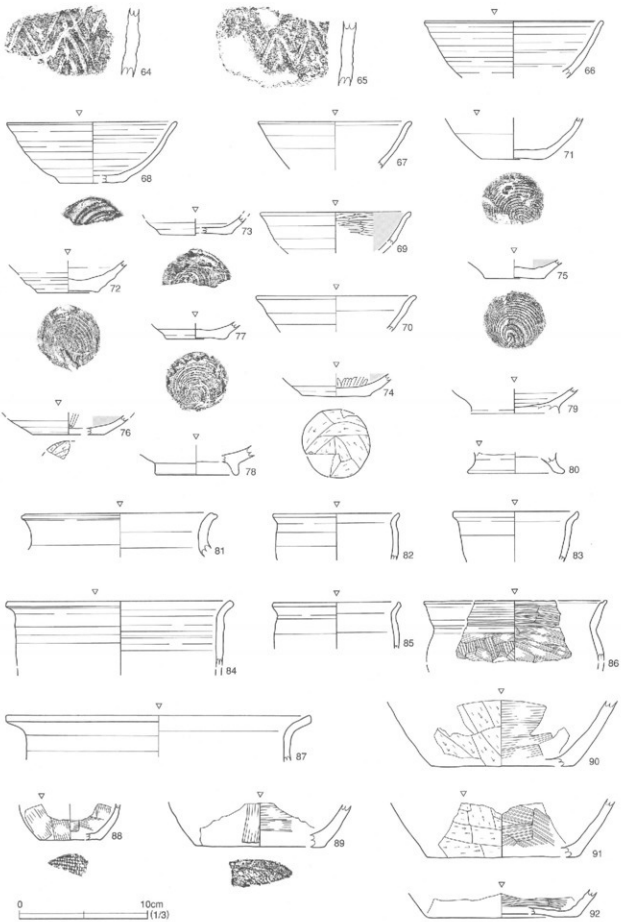
＜陶磁器＞碗（106～109）、皿（110～111）、釜（112）がある。106・107の陶磁器碗と111の陶磁器皿は瀬戸産であると思われる。

＜土製品＞113の面撰（泥面子）を掲載した。所属時期は18世紀後半～19世紀前半代であると思われる。

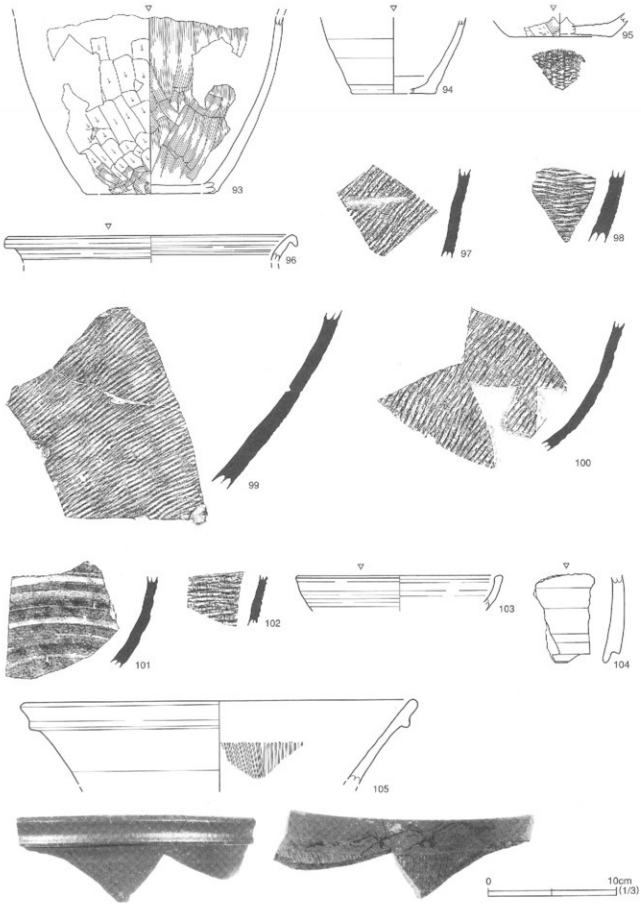
第1表　柱穴状土坑観察表

No	グリッド名	径(cm)	深さ(cm)	検出面標高(m)	底面標高(m)	備　考
1	VD1c	25 × 25	22.7	103.69	103.47	旧P79
2	VD1c	26 × 25	19.3	103.66	103.47	旧P76
3	VD1c	21 × 19	16.9	103.69	103.52	旧P78
4	ND10c	31 × 23	35.8	103.63	103.28	旧P50
5	ND10c	28 × 24	12.8	103.68	103.55	旧P54
6	ND10c	23 ×[21]	7.3	103.64	103.57	
7	ND10c	20 × 18	16.0	103.69	103.53	
8	ND10c	31 × 29	38.3	103.69	103.30	
9	VD1c	26 × 19	16.6	103.68	103.51	旧P198
10	VD1c	24 × 22	17.1	103.69	103.51	旧P197
11	ND10c	18 × 16	9.4	103.64	103.54	旧P99
12	ND10c	26 × 24	37.6	103.72	103.35	
13	ND10c	19 × 19	21.9	103.66	103.44	旧P200
14	ND10b	24 × 20	11.4	103.67	103.56	旧P199
15	ND10b	28 × 24	29.1	103.72	103.43	
16	ND10b	22 × 21	20.8	103.73	103.52	旧P72
17	VD1b	35 × 19	28.2	103.73	103.45	旧P193
18	VD1b	19 × 17	20.5	103.72	103.52	
19	ND10b	26 × 22	26.6	103.74	103.47	旧P71
20	VD1b	24 × 22	12.9	103.74	103.61	
21	ND10b	30 × 22	19.0	103.67	103.48	
22	ND10b	45 × 27	21.5	103.72	103.51	
23	ND10b	36 × 34	29.9	103.75	103.45	旧P67
24	VD1b	35 × 33	23.4	103.74	103.51	旧P68
25	VD1b	30 × 24	18.0	103.75	103.57	
26	ND10b	28 × 24	19.2	103.68	103.58	
27	VD1a	28 × 25	33.6	103.71	103.38	
28	WD10a	25 × 25	23.1	103.71	103.48	旧P192
29	ND10a	66 × 48	15.1	103.72	103.57	旧P26
30	WD10a	52 × 45	14.7	103.65	103.51	旧P20
31	ND10a	32 × 26	17.9	103.72	103.54	旧P58
32	ND10a	29 × 20	15.8	103.70	103.54	旧P8
33	ND10a	28 × 27	27.3	103.72	103.45	旧P10
34	WD10a	30 × 28	28.0	103.73	103.45	旧P9 土師器出土
35	WD10a	40 × 31	21.9	103.70	103.48	旧P21
36	WD10a	27 × 24	27.4	103.72	103.44	旧P11
37	ND10a	25 × 20	13.2	103.74	103.61	旧P12
38	VD1a	30 × 25	27.1	103.73	103.46	旧P60
39	ND10a	24 × 22	10.0	103.74	103.64	
40	WD10a	20 × 18	16.1	103.72	103.56	旧P22
41	ND10a	30 × 21	28.5	103.75	103.47	旧P13 土師器出土
42	ND10a	43 × 33	22.7	103.72	103.50	旧P191
43	WD10a	60 × 58	17.6	103.72	103.54	旧P7
44	ND10a	31 × 28	26.1	103.71	103.45	旧P14
45	ND10a	24 × 24	10.1	103.68	103.58	旧P4
46	WD10a	30 × 21	21.1	103.69	103.48	旧P5
47	NC10j	37 × 29	20.4	103.71	103.51	旧P6
48	NC10j	26 × 20	33.1	103.80	103.46	旧P15
49	NC10j	25 × 23	26.1	103.75	103.49	旧P16
50	NC10j	21 × 21	26.2	103.79	103.52	
51	VD2c	30 × 29	37.5	103.74	103.36	旧P164
52	VD2c	33 × 29	35.9	103.74	103.38	旧P165
53	VD1c	27 × 21	34.1	103.73	103.39	
54	VD1c	34 × 30	42.3	103.73	100.31	旧P190
55	VD1c	27 × 26	30.0	103.71	103.41	旧P80
56	VD2c	31 × 27	55.6	103.73	103.17	
57	VD1c	22 × 18	24.1	103.73	103.49	旧P189
58	VD2c	23 × 22	26.5	103.73	103.47	旧P206 土師器出土
59	VD2c	35 × 33	28.4	103.73	103.45	旧P162
60	VD1c	35 × 33	25.5	103.71	103.46	旧P175
61	VD2b	24 × 22	36.3	103.71	103.35	旧P158
62	VD2b	24 × 21	22.2	103.73	103.51	旧P159
63	VD2b	35 × 27	24.5	103.73	103.48	旧P160
64	VD2b	18 × 17	13.1	103.74	103.61	旧P155
65	VD2b	21 × 19	14.7	103.73	103.59	旧P156
66	VD2b	31 × 27	15.5	103.73	103.58	
67	VD2b	19 × 15	24.2	103.76	103.51	旧P142
68	VD2b	25 × 22	27.3	103.77	103.50	旧P141
69	VD1b	20 × 18	14.2	103.71	103.57	
70	VD1b	22 × 21	23.2	103.69	103.46	
71	VD2a	19 × 18	21.1	103.70	103.49	
72	VD1a	25 × 25	20.0	103.69	103.49	
73	VD1a	25 × 22	18.1	103.66	103.48	
74	VD2a	29 × 28	36.2	103.79	103.42	
75	VD1a	28 × 26	28.7	103.67	103.38	
76	VD2a	26 × 26	51.2	103.70	103.19	
77	VD1a	22 × 19	23.0	103.69	103.46	
78	VD1a	19 × 18	14.0	103.70	103.56	
79	VD1a	34 × 33	21.6	103.68	103.47	
80	VD1a	30 × 26	38.1	103.69	103.30	
81	VD1a	23 × 20	41.1	100.65	103.24	
82	VD1a	29 × 24	17.1	103.67	103.50	旧P126
83	VD2a	17 × 16	20.6	103.68	103.48	
84	VD1a	18 × 17	9.1	103.62	103.52	
85	VD2a	22 × 21	30.5	103.61	103.31	旧P128
86	VD1a	24 × 23	25.8	103.66	103.40	旧P127
87	VD1a	29 × 23	23.4	103.63	103.39	
88	VD1a	19 × 18	9.8	103.62	103.52	旧P129
89	VD1a	13 × 11	10.9	103.62	103.51	旧P132
90	VD1a	24 × 24	7.9	103.69	103.61	
91	VD1a	18 × 16	8.1	103.61	103.53	旧P208 土師器出土
92	VD1a	21 × 20	22.5	103.70	103.48	
93	VD1a	22 × 22	14.8	103.76	103.62	
94	VD1a	21 × 20	11.0	103.77	103.66	旧P59
95	VD1a	35 × 25	34.4	103.74	103.40	旧P33
96	VD1a	36 × 33	37.0	103.76	103.39	旧P32
97	VD1a	31 × 26	24.6	103.77	103.53	旧P196
98	VD1a	60 × 59	29.5	103.76	103.35	旧P82 面模出土
99	VD1a	27 × 26	24.0	103.88	103.64	旧P194
100	VD1a	27 × 24	11.7	103.77	103.66	
101	VD1a	36 × 25	20.5	103.78	103.57	旧P34
102	VC1j	55 ×[25]	29.5	103.79	103.49	旧P57
103	VC1j	45 × 36	30.7	103.78	103.47	旧P29 土師器出土
104	VC1j	61 × 50	41.8	103.78	103.36	旧P31
105	VC1j	34 × 31	38.3	103.79	103.40	旧P39
106	VC1j	25 × 23	12.7	103.78	103.65	

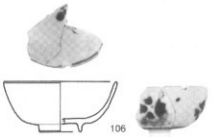
No	グリッド名	径(cm)	深さ(cm)	検出面標高(m)	底面標高(m)	備考
107	VC1j	24 × 24	37.1	103.80	103.43	
108	VC1j	40 × 26	20.9	103.80	103.59	
109	VC1j	33 ×[25]	24.0	103.81	103.57	旧P195
110	VC1j	48 × 30	30.5	103.81	103.50	
111	VC1j	30 ×[24]	26.0	103.81	103.55	
112	VC1j	26 × 19	19.8	103.81	103.61	旧P209 上師器出土
113	VC1j	33 × 31	42.5	103.80	103.38	旧P40
114	VC1j	33 × 25	27.1	103.81	103.54	
115	VC1j	23 × 23	15.6	103.83	103.68	旧P99
116	VC1j	24 × 18	11.9	103.81	103.70	旧P26
117	VC1j	27 × 26	11.8	103.82	103.70	旧P27
118	VC1j	41 × 33	42.3	103.80	103.38	旧P28
119	VC1j	27 × 26	25.6	103.82	103.56	旧P35
120	VC1j	22 × 20	29.0	103.82	103.53	旧P44
121	VC1j	20 × 20	14.0	103.83	103.69	旧P48
122	VC1j	26 × 17	7.0	103.82	103.75	旧P43
123	VC1j	23 × 16	11.1	103.83	103.72	旧P42
124	VC1j	22 × 22	12.4	103.83	103.71	旧P47
125	VC1j	27 × 22	44.4	103.84	103.40	旧P46
126	VC1j	28 × 27	15.7	103.84	103.68	旧P98
127	VD2c	16 × 12	24.3	103.60	103.36	旧P167
128	VD2c	26 × 26	28.5	103.73	103.45	旧P169
129	VD2c	24 × 21	22.0	103.71	103.49	旧P170
130	VD3c	24 × 20	19.7	103.72	103.52	旧P171
131	VD3c	35 ×[17]	19.4	103.71	103.52	旧P172
132	VD2c	20 × 20	17.3	103.73	103.56	旧P166
133	VD2c	20 × 19	23.9	103.73	103.49	旧P203
134	VD3c	29 × 25	38.2	103.70	103.32	旧P202
135	VD3c	25 × 24	18.6	103.73	103.54	
136	VD4c	24 ×[13]	7.1	103.73	103.66	旧P186
137	VD4c	26 × 25	23.9	103.69	103.45	
138	VD1b	17 × 17	3.7	103.71	103.68	
139	VD1b	28 × 28	25.5	103.70	103.44	旧P152
140	VD1b	22 × 21	34.1	103.69	103.35	旧P151
141	VD1b	30 × 26	28.9	103.71	103.42	
142	VD3b	23 × 21	30.8	103.71	103.40	旧P173
143	VD3b	22 × 21	24.0	103.72	103.48	旧P175
144	VD1b	38 × 37	17.9	103.70	103.52	旧P153
145	VD3b	20 × 20	20.3	103.72	103.52	旧P177
146	VD3b	23 × 23	23.1	103.73	103.50	旧P180
147	VD1b	20 × 19	31.3	103.72	103.41	
148	VD1b	23 × 17	28.7	103.69	103.41	
149	VD1b	18 × 16	17.0	103.71	103.54	
150	VD1b	24 × 17	26.8	103.70	103.43	
151	VD1b	19 × 16	37.9	103.69	103.31	
152	VD1b	23 × 21	29.2	103.71	103.41	
153	VD1b	21 × 20	19.6	103.70	103.50	
154	VD1b	24 × 22	16.1	103.68	103.52	
155	VD1b	28 × 25	35.5	103.68	103.33	
156	VD1b	18 × 16	13.1	103.70	103.57	
157	VD1b	25 × 21	33.2	103.75	103.42	
158	VD1b	20 × 18	13.7	103.74	103.60	旧P147 上師器出土
159	VD3b	39 × 26	38.6	103.70	103.32	旧P148 土師器出土
160	VD3b	30 × 25	28.5	103.68	103.40	旧P146 上師器出土
161	VD1b	23 × 23	25.8	103.77	103.51	
162	VD3b	25 × 20	16.4	103.77	103.61	旧P65
163	VD3a	20 × 16	18.5	103.79	103.61	旧P92
164	VD3a	25 × 20	22.7	103.78	103.56	旧P64
165	VD3a	20 × 20	24.4	103.81	103.57	土師器出土
166	VD1b	21 × 20	25.1	103.77	103.52	旧P143
167	VD1b	16 × 16	29.3	103.76	103.56	旧P144
168	VD2a	34 × 27	12.9	103.71	103.58	旧P88
169	VD2a	29 × 28	13.7	103.71	103.58	旧P87
170	VD2a	27 × 21	17.8	103.70	103.53	旧P90
171	VD2a	21 × 21	13.8	103.71	103.57	旧P91
172	VD2a	19 × 17	24.2	103.76	103.52	旧P92
173	VD3a	62 × 57	20.1	103.78	103.58	
174	VD3a	20 × 19	25.2	103.77	103.51	旧P62
175	VD3a	25 × 17	28.8	103.68	103.39	
176	VD3a	19 × 18	13.8	103.66	103.53	
177	VD2a	23 × 20	12.3	103.71	103.59	旧P84
178	VD2a	21 × 18	18.6	103.70	103.51	旧P85
179	VD2a	23 × 22	16.5	103.70	103.53	旧P89
180	VD2a	26 × 21	28.8	103.72	103.43	旧P123
181	VD2a	31 × 28	54.5	103.78	103.23	旧P95
182	VD2a	29 × 21	22.5	103.78	103.56	
183	VD2a	21 × 20	23.5	103.78	103.55	旧P94
184	VD2a	28 × 26	18.0	103.74	103.56	旧P134
185	VD2a	26 × 25	21.3	103.76	103.55	旧P140 土師器出土
186	VD2a	74 × 47	79.6	103.67	102.88	
187	VD2a	80 × 74	23.4	103.79	103.56	
188	VD3a	33 × 26	41.2	103.79	103.38	
189	VD3a	28 × 26	50.2	103.81	103.30	旧P111
190	VD3a	20 × 18	24.3	103.80	103.56	
191	VD2a	26 × 25	33.6	103.79	103.45	
192	VD2a	35 × 34	47.0	103.79	103.32	旧P201
193	VC3j	24 × 20	25.2	103.78	103.53	旧P109
194	VC2j	26 × 19	20.1	103.83	103.63	
195	VC3j	24 × 24	20.9	103.79	103.58	
196	VC2j	27 × 24	27.6	103.83	103.55	
197	VC2j	31 × 25	24.9	103.83	103.58	
198	VC2j	24 × 23	19.0	103.81	103.62	
199	VC3j	21 × 20	22.9	103.79	103.56	
200	VC2j	39 × 29	44.2	103.84	103.39	
201	VC2j	29 × 23	14.0	103.83	103.69	
202	VC2j	20 × 19	14.3	103.82	103.68	
203	VC2j	25 × 19	27.0	103.82	103.55	
204	VC2j	30 × 28	19.9	103.80	103.61	
205	VC2j	31 × 27	27.2	103.81	103.54	
206	VD3b	24 × 18	13.7	103.71	103.58	
207	VD3b	21 × 20	12.1	103.71	103.59	
208	VD4a	27 × 25	9.6	103.74	103.64	
209	VD4a	30 × 25	16.5	103.75	103.58	
210	VD5a	41 × 35	41.4	103.59	103.18	土師器出土
211	VC5j	45 × 45	44.7	103.69	103.25	
212	IVC10j	26 × 20	15.4	103.75	103.60	

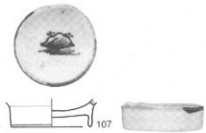


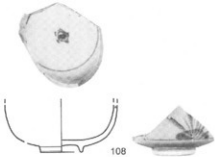
第27図　遺構外出土遺物（1）

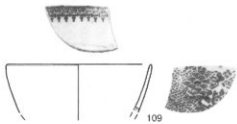


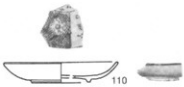
第28図　遺構外出土遺物（2）

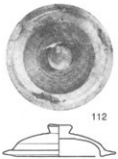


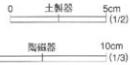












第29図　遺構外出土遺物（3）

第２表　土器観察表

図番	登番	遺構名	出土位置・層位	器種	法量（cm） 口径	器高	底径	調整 内面／外面	色調 内面／外面	焼成	胎土	備考	分類	図版	写版
1	4	SK103	①ベルト	須恵器 小型壺	—	[2.35]	4.7	ロクロナデ/ロクロナデ	N7/灰白/N7/灰白	良	砂含・白色粒含	反転実底部回転糸切	—	10	13
7	5	SK06	南東 埋土	土師器 坏	[14.8]	[3.45]	—	ヘラミガキ/ロクロナデ	7.5YR7/4にぶい橙	良	砂含・白色粒含	反転実測	A1	14	13
8	6	SK06	南西 1層	土師器 甕	—	[2.8]	—	ロクロナデ	10YR6/3にぶい黄橙/10YR6/3にぶい黄橙	良	細砂含	平面実測	I A	14	13
36	7	SK07	東 埋土	土師器 甕	—	[2.9]	—	ヘラミガキ/ロクロナデ	10YR8/4浅黄橙10YR8/4浅黄橙	良	砂含	平面実測	I A	18	14
61	43	SD03	埋土	須恵器 大甕		[2.4]	—	-/タタキメ	10YR8/2灰白	良	砂含		—	26	14
64	41	遺構外	ⅣD8d Ⅲ層	縄文	—	[5.3]	—	木目状撚糸文	10YR7/4にぶい黄橙	良	砂・小石含	大木6～7a式	—	27	15
65	42	遺構外	ⅣD8e Ⅲ層	縄文	—	[4.9]		木目状撚糸文	10YR5/3にぶい黄褐	良	砂・小石含	大木6～7a式		27	15
66	27	遺構外	T1 Ⅲ層	土師器 坏	(14.0)	[4.5]		内黒・ロクロナデ/ロクロナデ	10YR2/1黒/10YR8/4浅黄橙	良	砂含	反転実測	B1	27	15
67	13	遺構外	ⅣD6e	土師器 坏	(12.0)	[3.9]	—	ロクロナデ	10YR8/3浅黄橙10YR8/3浅黄橙	良	細砂含	反転実測	B2	27	15
68	21	遺構外	ⅣD8e Ⅲ層	土師器 坏	(13.4)	4.8	(5.0)	ロクロナデ/ロクロナデ	7.5YR8/4浅黄橙	良	砂含	反転実測・底面回転糸切 無調整	B2	27	15
69	24	遺構外	ⅣD9d Ⅲ層 中位	土師器 坏	(11.8)	[3.3]	—	内黒・ヘラミガキ/ロクロナデ	10YR2/1黒/10YR7/4にぶい黄橙	良	細砂含	反転実測	A2	27	15
70	17	遺構外	ⅣD8e Ⅲ層 中位	土師器 坏	(12.5)	[2.8]	—	ロクロナデ/ロクロナデ	10YR8/3浅黄橙/10YR8/3浅黄橙	良	細砂含	反転実測	B2	27	15
71	20	遺構外	ⅣD8c Ⅲ層	土師器 坏	—	[3.25]	(5.0)	ロクロナデ/ロクロナデ	10YR7/3にぶい黄橙/10YR8/3浅黄橙	良	砂含	反転実測・底面回転糸切 無調整	B2	27	15
72	11	遺構外	ⅣD5d Ⅲ層 中位	土師器 坏	—	[2.5]	4.8	ロクロナデ	10YR8/3浅黄橙10YR8/3浅黄橙	良	砂含密			27	15
73	35	遺構外	T2 Ⅲ層 上位	土師器 坏		[1.6]	(5.6)	ロクロナデ/ロクロナデ	10YR8/3浅黄橙/10YR8/3浅黄橙	良	細砂含	反転実測・底部回転糸切痕	—	27	15
74	29	遺構外	T1 Ⅲ層	土師器 坏	—	[1.8]	5.4	内黒・ミガキ/ロクロナデ	10YR2/1黒/10YR7/2にぶい黄橙	良	細砂含	底部ヘラケズリ	—	27	15
75	22	遺構外	ⅣD8e Ⅲ層	土師器 坏	—	[1.6]	4.6	内黒・ロクロナデ	10YR2/1黒/10YR8/4浅黄橙	良	砂含	反転実測	—	27	15
76	23	遺構外	ⅣD8d Ⅲ層	土師器 坏	—	[1.8]	(5.5)	内黒・ヘラミガキ/黒色処理・ロクロナデ	10YR2/1黒/5Y2/1黒	良	細砂含・粗砂	反転実測・底部ヘラケズリ・ヘラミガキ	—	27	15
77	15	遺構外	ⅣD7e Ⅲ層 中位	土師器 坏	—	[1.3]	(4.8)	ロクロナデ	10YR8/4浅黄橙	良	砂含	底部回転糸切	—	27	15
78	8	遺構外	VC2i Ⅰ層	土師器 高台坏	—	[2.3]	(6.7)	ロクロナデ	10YR8/4浅黄橙/10YR8/4浅黄橙	良	砂含	反転実測	—	27	15
79	14	遺構外	ⅣD7e Ⅲ層 中位	土師器 坏	—	[1.8]	—	ロクロナデ/ロクロナデ	7.5YR6/4にぶい橙/7.5YR6/4にぶい橙	良	細砂含		—	27	15
80	1	遺構外	ⅣD6b Ⅰ層	土師器 高台坏	—	[1.6]	(7.4)	ロクロナデ/ロクロナデ	7.5YR8/4浅黄橙/7.5YR8/4浅黄橙	良	細砂			27	15
81	26	遺構外	VⅡ5a	土師器 甕	(15.4)	[3.5]	—	内黒・ロクロナデ/ロクロナデ	10YR2/1黒/7.5YR7/6橙	良	砂含	反転実測	I A	27	15
82	36	遺構外	調査区北 Ⅲ層 上位	土師器 小型甕	(9.8)	[3.7]	—	ロクロナデ/ロクロナデ	7.5YR6/4浅黄橙/7.5YR6/4浅黄橙	良	砂含	反転実測	I D	27	15
83	32	遺構外	T2 Ⅲ層 上位	土師器 小型甕	(9.6)	[4.0]	—	ロクロナデ/ロクロナデ	10YR7/3にぶい黄橙/10YR7/3にぶい黄橙	良	砂含	反転実測・内外面煤付着	I D	27	15
84	30	遺構外	T1 Ⅲ層	土師器 甕	(18.0)	[5.8]	—	ロクロナデ/ロクロナデ	10YR6/4にぶい黄橙/10YR6/4にぶい黄橙	良	砂含	反転実測	I B	27	15
85	33	遺構外	T2 Ⅲ層 上位	土師器 小型甕	(10.0)	[3.7]	—	ロクロナデ/ロクロナデ	10YR5/3にぶい黄橙/10YR5/3にぶい黄橙	良	細砂含	反転実測・煤付着	I D	27	15
86	38	遺構外	調査区北 Ⅲ層 上位	土師器 甕	(16.3)	[4.9]		ヘラナデ・ハケメ/ヨコナデ・ヘラナデ・ハケメ	7.5YR6/6橙/7.5YR6/6橙	良	砂含	反転実測	Ⅱ	27	15
87	16	遺構外	ⅣⅡ7c	土師器 甕	(23.9)	[3.5]	—	ロクロナデ/ロクロナデ	5YR7/4にぶい橙/5YR7/4にぶい橙	良	砂含	反転実測	I B	27	15
88	40	遺構外	T2 Ⅲ層	土師器 小型甕	—	[2.8]	(4.8)	ヘラナデ/ヘラナデ	10YR7/4にぶい黄橙/10YR7/4にぶい黄橙	良	粗砂含	反転実測・底面網代痕	Ⅱ	27	15
89	12	遺構外	ⅣⅡ6e	土師器 甕	—	[3.4]	(10.1)	ヘラナデ/強力ヘラナデ	10YR7/6明黄橙10YR7/6明黄橙	良	砂含	反転実測・底部網代痕	Ⅱ	27	15
90	18	遺構外	ⅣⅡ8e Ⅲ層 中位	土師器 甕	—	[5.2]	(11.0)	ヘラナデ/ヘラケズリ	10YR7/4にぶい黄橙/10YR7/4にぶい黄橙	良	小石少量・砂含	反転実測	Ⅱ	27	15
91	34	遺構外	T2 Ⅲ層 上位	土師器 甕	—	[4.6]	(11.7)	ハケメ/ヘラケズリ	10YR8/4浅黄橙/10YR8/4浅黄橙	良	砂含	反転実測	Ⅱ	27	15
92	19	遺構外	ⅣⅡ8c Ⅲ層 下位	土師器 甕		[2.0]	(11.8)	ハケメ/摩滅著しく不明	10YR7/3にぶい黄橙/10YR7/3にぶい黄橙	良	砂含	反転実測	Ⅱ	27	15
93	31	遺構外	T1 Ⅲ層	土師器 甕	—	[13.85]	(10.0)	ヘラナデ/ヘラナデ・ヘラケズリ	10YR6/3にぶい黄橙/10YR6/4にぶい黄橙	良	砂含	反転実測	Ⅱ	28	15
94	37	遺構外	調査区北 Ⅲ層 上位	土師器 甕	—	[6.0]	(6.4)	ロクロナデ/ロクロナデ	10YR8/4浅黄橙/10YR8/4浅黄橙	良	粗砂含	反転実測	I C	28	15
95	28	遺構外	T1 Ⅲ層	土師器 甕		[1.8]	(8.0)	ヘラナデ摩滅はっきりしない/ヘラケズリ・ケラナデ	10YR8/3浅黄橙/10YR8/3浅黄橙	良	砂含	反転実測・底面網代痕	Ⅱ	28	15
96	49	遺構外	VD2c Ⅲ層	須恵器 甕	(23.0)	[2.05]	—	ロクロナデ/ロクロナデ	5PB/1暗青灰/5Y6/1灰	良	砂含	反転実測	—	28	15
97	50	遺構外	ⅣD8e Ⅲ層	須恵器 大甕	—	[6.8]		ナデ/タタキメ	2.5Y4/1黄灰	良	砂含			28	15
98	45	遺構外	VC4i Ⅲ層	須恵器 大甕		[5.7]	—	指押え/タタキメ	10YR8/2灰白	良	砂含		—	28	15
99	44	遺構外	ⅣD7e Ⅲ層 中位	須恵器 大甕	—	[13.5]	—	指押え/タタキメ	10YR7/3にぶい黄橙	良	砂含		—	28	15
100	47	遺構外	T1 Ⅲ層	須恵器 大甕	—	[9.5]		指押え/タタキメ	2.5Y5/1黄灰	良	砂含		—	28	15
101	46	遺構外	T1 Ⅲ層	須恵器 壺	—	[6.7]	—	ロクロナデ/ロクロナデ	2.5Y5/1黄灰	良	砂含 小石微量		—	28	15
102	48	遺構外	T2 Ⅲ層 上位	須恵器 大甕	—	[3.7]	—	指押え／タタキメ	2.5Y5/1黄灰	良	砂含		—	28	15

第3表　陶磁器観察表

図番	登番	遺構名	出土位置・層位	器種	産地	時期	胎土	法量[cm] 口径	器高	底径	図版	写版
2	3	SK103	④ベルト堆土	ほうろく			砂含		[4.6]	(8.0)	10	13
9	2	SK06	東西ベルト 東	火鉢	在地？	19世紀？	砂含	－	[11.7]	19.2	14	13
10	115	SK06	北西 埋土	碗	瀬戸	19世紀前半		9.2	4.45	3.0	14	－
11	104	SK06	南北ベルト北側 埋土	碗	瀬戸	19世紀前半		(4.6)	1.15	1.4	14	－
12	111	SK06	北西 堆土	碗	在地	19世紀		8.2	4.25	3.4	14	
13	109	SK06	北西 埋土	碗	在地？	19世紀？		(12.9)	[5.1]	－	14	－
14	114	SK06	北西 埋土	碗				－	[3.6]	5.8	14	－
15	119	SK06	東西ベルト西 埋土	碗	？	19世紀		(7.4)	4.25	(3.8)	14	－
16	120	SK06	東西ベルト東 埋土	碗	？	19世紀		(7.0)	[4.1]	－	14	－
17	116	SK06	南西 2層	碗				(9.0)	[4.1]	－	14	－
18	100	SK06	堆土	小碗				5.8	[2.2]	－	14	－
20	102	SK06	南北ベルト北側 堆土	碗	肥前？	19世紀		(8.9)	4.6	3.4	15	－
21	101	SK06	埋土	皿	肥前	18～19世紀		(14.0)	4.3	(7.2)	15	－
22	117	SK06	南西 2層	碗	肥前	19世紀前半		－	[3.9]	3.3	15	－
23	107	SK06	北東 埋土	皿	大堀相馬？	19世紀前半		(10.0)	2.3	(4.0)	15	－
24	105	SK06	南北ベルト北側 埋土	皿	肥前	18世紀後半～19世紀前半		(16.2)	4.2	(9.8)	15	－
25	106	SK06	南北ベルト北側 埋土	皿				－	[3.7]	(8.4)	15	－
26	108	SK06	南北ベルト北 埋土	瓶				(6.4)	5.15	3.5	15	－
27	113	SK06	北西 埋土	皿	肥前	19世紀前半		－	[1.3]	(8.8)	15	－
28	112	SK06	北西 埋土	猪口	肥前	19世紀前半		－	[2.6]	5.6	15	－
29	103	SK06	南北ベルト北側 埋土	壺		19世紀		(8.6)	4.2	3.0	15	－
30	110	SK06	北西 堆土	鉢				(15.9)	4.9	(6.4)	15	－
37	128	SK07	堆土	碗	在地	19世紀前半		(9.4)	[3.6]	－	18	－
38	132	SK07	東 堆土	碗	瀬戸	19世紀前半		(7.1)	[2.6]	6.4	18	－
39	131	SK07	堆土	碗	肥前	19世紀前半		11.1	5.7	6.4	18	－
40	130	SK07	堆土	碗	瀬戸	19世紀前半		11.0	[5.2]	－	18	－
41	133	SK07	ベルト堆土	碗				5.7	[2.1]	－	18	－
42	127	SK07	堆土	碗	？	19世紀前半か		－	[2.7]	(3.8)	18	－
43	124	SK07	堆土	皿	瀬戸	19世紀前半		9.6	2.65	5.3	18	－
44	126	SK07	堆土	碗	瀬戸	19世紀前半		8.6	4.85	5.0	18	－
45	121	SK07	堆土	皿				10.2	3.1	4.0	18	
46	129	SK07	堆土	皿	肥前	19世紀		(9.6)	2.3	4.6	18	
47	122	SK07	東 堆土	皿				－	[2.4]	7.4	18	－
48	123	SK07	堆土	急須				(6.6)	[5.1]	－	18	－
49	9	SK08	RP 1	火鉢			砂含	－	[6.8]	－	19	14
50	137	SK08	東 堆土	碗	瀬戸	19世紀前半		(7.2)	6.1	(3.8)	19	－
51	138	SK08	東 堆土	碗	瀬戸	19世紀前半		－	[4.8]	(3.4)	19	－
52	136	SK08	東 堆土	小皿				(9.2)	1.5	(4.2)	19	－
53	135	SK08	東 堆土	小皿				(9.2)	1.5	(4.2)	19	－
54	139	SK08	東 堆土	瓶				－	[10.0]	－	19	－
55	134	SK08	堆土	灯明皿				(7.4)	[3.7]	－	19	－
57	141	SD01A	堀土上位	碗・香炉	大堀相馬	19世紀？		(10.15)	[2.4]	－	26	－
58	140	SD01A	堀土	皿	？	19世紀？		－	[1.8]	(8.9)	26	－
59	51	SD01A	P2 堀土	擂鉢			砂含	(27.0)	15.5	(10.0)	26	14
103	25	遺構外	VD1a 検出面	ほうろく			砂含	(16.2)	[2.8]		28	15
104	39	遺構外	T2 I層	瓶			粗砂含	－	[6.8]	－	28	15
105	149	遺構外	I層	擂鉢				(31.1)	[6.5]	－	28	－
106	146	遺構外	検出面 IV層	湯呑み	瀬戸	19世紀前半		(8.9)	4.0	(3.4)	29	－
107	144	遺構外	検出面 IV層	碗	瀬戸	19世紀前半		－	[2.2]	6.3	29	－
108	148	遺構外	I層	湯呑		19世紀代		－	[3.8]	3.3	29	－
109	143	遺構外		碗		近代		(11.4)	[3.8]	－	29	－
110	147	遺構外	I層	小皿		近代		(9.0)	1.6	(4.7)	29	－
111	145	遺構外	検出面 IV層	皿	瀬戸	19世紀前半		13.6	3.65	7.4	29	－
112	142	遺構外	撹乱	土瓶蓋				8.95	2.5	－	29	－

第4表　石製品観察表

図番	登番	遺構名	出土位置・層位	器種	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	図版	写版
31	200	SK06	5層	磨石	ほぼ全面磨られている。一部に擦敲有。	24.1	16.5	6.1	3.150	デイサイト・新生代第三期・奥羽山脈・古生代デボン紀	16	14
32	203	SK06	北西 埋土	硯		(7.9)	(2.3)	1.2	31.41	赤紫色・凝灰岩・北上山地・東山町付近？・古生代デボン紀	16	14
56	202	SK08	東 埋土	磨石	ほぼ全面磨られている。	12.6	11.85	5.35	929.80	デイサイト・新生代第三期・奥羽山脈・古生代デボン紀	19	14
63	201	P210	埋土	磨石	ほぼ全面磨られている。炭の付着が認められる。	19.0	15.5	4.6	1,567.05	デイサイト・新生代第三期・奥羽山脈・古生代デボン紀	26	14

第5表　土製品観察表

図番	登番	遺構名	出土位置・層位	器種	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	色調	焼成	胎土	図版	写版
19	118	SK06	南西 2層	面模	衣布痕。裏指痕	[2.6]	[1.8]	[0.6]	3.06	7.5YR7/6橙	良	砂含	14	—
33	300	SK06	南西 1層	人形	手づくね胴部馬	[5.15]	[2.8]	[3.0]	36.05	7.5YR7/6橙	良	砂含	16	14
34	302	SK06	南東埋土 2層	面模	顔。型押し。裏指痕	[3.0]	[3.15]	0.95	7.09	7.5YR8/6浅黄橙	良	砂含	16	14
35	301	SK06	南西 1層	面模	顔？型押し。裏指痕	[3.0]	[3.9]	0.9	6.37	10YR8/4浅黄橙	良	砂含	16	14
60	303	SD01A	埋土	面模	型押し。裏指痕	[3.3]	[2.6]	1.0	6.36	7.5YR7/4にぶい橙	良	砂含	26	14
62	10	P98	埋土	面模	表布痕。裏指痕	[2.6]	[1.6]	[0.6]	2.96	7.5YR6/6橙	良	砂含	26	14
113	304	遺構外	1層	面模	型押し。裏指痕	[2.25]	[3.3]	0.5	2.90	7.5YR6/6橙	良	砂含	29	15

第6表　金属製品観察表

図番	登番	遺構名	出土位置・層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)	備考	図版	写版
6	150	SK05	埋土	銅管	8.25	1.15	10.19	長さ8.25cm、身径0.45～1.15cm。	12	13

第7表　木製品観察表

図番	登番	遺構名	出土位置・層位	器種	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	材質	備考	図版	写版
3	251	SE01	RW1	井戸枠	98.4	19.2	1.6	マツ属複維管束亜属		—	13
4	252	SE01	RW2	井戸枠	95.7	18.9	1.7	マツ属複維管束亜属		—	13
5	253	SE01	RW3	井戸枠	89.1	11.1	1.7	マツ属複維管束亜属		—	13

Ⅵ 自然科学分析

ＳＥ01井戸跡出土井戸枠の樹種同定

株式会社古環境研究所

1 はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2 試　　料

試料は、Ⅵ層上面で検出されたSE01井戸跡の井戸枠材（RW3）１点である。

3 方　　法

カミソリを用いて試料の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4 結　　果

同定の結果、試料はマツ属複維管束亜属 *Pinus subgen. Diploxylon* であった。以下に同定の根拠となった特徴を記し、各断面の顕微鏡写真を図版に示す。

マツ属複維管束亜属　*Pinus subgen. Diploxylon*　マツ科

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質よりマツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属にはクロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する。常緑高木であり、材は水湿によく耐え広く用いられる。

5 所　　見

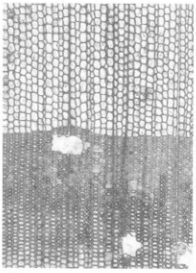
同定の結果、金梁Ⅰ遺跡出土の木材はマツ属複維管束亜属であった。マツ属複維管束亜属には、二次林を形成するアカマツと海岸林を形成するクロマツとがあり、いずれも温帯域を中心に広く分布する常緑高木である。いずれの材も水湿に良く耐える材であり、遺跡周辺からもたらされたものと考えられる。

参 考 文 献

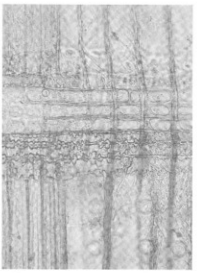
佐伯浩・原田浩　(1985)　針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.
佐伯浩・原田浩　(1985)　広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.
島地謙・伊東隆夫　(1988)　日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296
山田昌久　(1993)　日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成．植生史研究特別第１号．植生史研究会，p.242

編者註
ＳＥ01ＲＷ3は掲載番号５である。

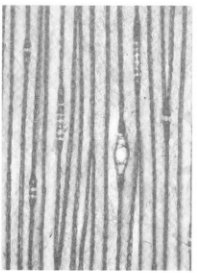
金栗Ｉ遺跡の木材



横断面 ―――― ：0.5mm



放射断面 ―――― ：0.1mm



接線断面 ―――― ：0.2mm

SE01 RW3　マツ属複維管束亜属

Ⅶ　ま　と　め

ここでは、第1節で遺構、第2節で縄文・平安時代の土器、第3節で近世の遺物についてのまとめと若干の検討を行う。ただし、出土量が少ない遺物は、個別の検討のみ行った。

今回の調査で検出した遺構、出土遺物は以下の通りである。

＜遺構＞縄文時代の陥し穴状遺構5基、時期不明の竪穴状遺構1棟・土坑4基、溝跡15条・柱穴状土坑212個等を検出した。

＜遺物＞縄文土器2点、平安時代の土師器大コンテナ1箱（5,590ｇ）、須恵器9号袋1袋分（468ｇ）、陶磁器中コンテナ1箱（3,815ｇ）、石製品4点（5,678ｇ）、土製品7点（57ｇ）、煙管1点（10ｇ）出土した。このほかに近現代の遺物ではあるが、金属製品・鉄滓・銭貨が出土している。

1　遺　　構

＜陥し穴状遺構＞調査区中央～北を中心に溝状3基、円形状2基の計5基検出した。検出面は全てⅥ層面である。溝状は規模・軸方向がほぼ同じである。埋土はいずれもⅤ層起源の黒色土である。遺物は出土していない。形状と埋土の堆積状況から、所属時期は縄文時代の可能性が高い。

＜竪穴状遺構＞調査区中央から1棟検出した。東側が調査区外のため平面形・規模ははっきりしないが、残存状況から4.6×4.0ｍの隅丸長方形状を呈するものと思われる。床面は中央やや南よりに段差があり南側が北側より高い。比高差7㎝を測る。北側は中心部が丸底風に窪み、南側は概ね平坦である。埋土から近世のほうろく？が出土している。形状・遺物から勘案すると、近世の竈？の可能性がある。

＜井戸跡＞調査区南から1基検出した。ＳＤ01Ａ構築時に大半を消失しているため、本来の規模ははっきりしない。平面形は隅丸方形状を呈し、開口部121×116㎝、底部104×95㎝を測る。深さ32～42㎝残存している。壁は外傾している。各コーナーから中央に向かって5～20㎝程内側と北壁中央壁際の計5箇所に10～20㎝の杭が刺さっている。杭は井戸枠を構成する板をおさえるためのものと思われる。板は概ね長さ94～96㎝、幅20㎝程の大きさのもので、一部に工具痕がみとめられる。井戸枠の範囲は92×84㎝の方形状を呈する。出土遺物がないため所属時期は不明であるが、重複関係等からみて近世の遺構であると思われる。

＜土坑＞調査区中央付近を中心に土坑は4基検出した。平面形は方形・隅丸方形状とさまざまである。埋土はみな人為的に埋め戻されている。土坑からは土師器・須恵器・近世陶磁器等が出土している。大半の土坑は近世陶磁器の出土量が圧倒的に多い（ＳＫ06～08）。中には埋土上位は土師器・須恵器、下位は近世陶磁器のみ出土する土坑（ＳＫ06）がある。これらの土坑は遺物出土状況と埋土の堆積状況から、近世のゴミ穴であると判断している。なお、埋土上位の土師器・須恵器は土坑構築時や埋め立て時にⅤ層の古代の遺物包含層を掘削したため流入したものと推測される。

＜溝跡＞調査区各地から15条検出した。調査区の制約から全長は不明だが、幅20～50㎝、埋土が黒色～黒褐色土系のものが多い。遺物は摩滅した土師器・須恵器、近世陶磁器が若干出土した。軸方向は西北西－東南東方向が9条、東西方向1条、北西－南東方向1条、北北東－南南西方向3条、北北西－南南東方向1条で、西北西－東南東方向が大半を占め、次いで北北東－南南西方向の溝が多い。調査区南端で接する道路が西北西－東南東方向であることと関連があるのかもしれない。なお、北西－南東方向のＳＤ06は検出・埋土状況と遺物から、所属時期が古代の可能性がある。

2　縄文・古代の遺物

（1）縄文土器

縄文土器は調査区北の埋没沢から２点出土し、２点とも掲載した。64・65は深鉢の体部破片である。木目状撚糸文が施文されている。大木６～７ａ式であると思われる。

（2）土師器・須恵器

土師器・須恵器は総量で大コンテナ１箱分、重量にして約６kg出土している。器種は土師器坏・高台坏・甕、須恵器大甕・小型壺がある。大半が調査区中央より北側から出土している。特に調査区北の埋没沢からの出土量が多い（なお試掘トレンチＴ１～Ｔ３は、埋没沢東端にＴ１、ＳＫ06・07付近にＴ２、ＳＤ01付近にＴ３を設定した）。

今回の調査で出土した土器の分類を以下に記載する。ただし、土師器坏・甕以外の土器類（縄文土器・須恵器等）は出土点数が少ないため、分類は行わず一括して扱う。

分　類

＜土師器坏＞黒色処理をＡ類、非黒色処理をＢ類とし、器形の特徴を数字で１・２と分類しその後に付けることで判別できるようにした。

１：体部が丸みを持って、そのまま口縁部まで立ち上がるもの

２：体部が丸みを持って口縁部まで立ち上がり、口縁部が外反しているもの

＜土師器甕＞ロクロ成形の有無でⅠ類とⅡ類に分類し、Ⅰ類は器形の特徴からＡ～Ｄ類に細分した。なお、ここでは口径15cm以下を中・小型甕とした。

甕Ａ：ロクロ成形。体部は丸みを帯びており、口縁部が外反し、先端部は面取りしているもの

甕Ｂ：ロクロ成形。体部が直線的で、口縁部が外反しているもの

甕Ｃ：ロクロ成形の甕底部のみのものを一括した

甕Ｄ：ロクロ成形の中型甕。体部が丸みを持って立ち上がり、口縁部が外反しているもの

甕Ｅ：ロクロ成形の中型甕。体部が外傾し、口縁部が外傾しているもの

甕Ｆ：非ロクロ成形のものを一括した

事実記載

＜土師器坏＞黒色処理の坏Ａ１・Ａ２、非黒色処理の坏Ｂ１・Ｂ２、高台坏に分けられる。７は坏Ａ１である。内面に黒色処理が施されている。体部が丸みを持ち、口縁部まで立ち上っている。69は坏Ａ２である。内面に黒色処理が施されている。体部が丸みをもって立ち上がり、口縁部が外反している。66は坏Ｂ１である。体部が丸みをもち、口縁部まで立ち上がっている。67・68・70・71は坏Ｂ２である。体部が丸みをもって立ち上がり、口縁部が外反している。68・71の底面切り離し技法は回転糸切り無調整である。次に底部破片を見てみる。74・76は面黒色処理、ヘラケズリ再調整が施されたものである。72・73・75・77は底部に張り出しがあり、底面切り離し後再調整が施されていないものである。

＜土師器高台坏＞３点出土した。直立しているものと（78・79）、ハの字状（80）に開くものがある。

＜土師器甕＞ロクロ成形のＩＡ～ＩＣ、ロクロ成形の中型甕ＩＤ・ＩＥ、非ロクロ成形のⅡがある。８・36・81はＩＡである。体部は丸みを帯びており、口縁部が外反し、先端部は面取りしている。84・87はＩＢである。体部が直線的で、口縁部が外反している。94はロクロ成形の甕底部である。摩滅が

著しく底面の切り離しは不明である。82・85はＩＤである。体部が丸みを持ち、口縁部が外反している。85には煤の付着が認められる。83はＩＥである。体部が外傾し、口縁部が外傾している。内外面に煤の付着が認められる。86・88～93・95はⅡである。86は内面ハケメ・ヘラナデ、外面ハケメ調整が施されている。88～90・93・95は外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ調整が施されている。88・89・95の底部には網代痕が認められる。91・92は外面ヘラケズリ、内面ハケメ調整が施されている。

＜須恵器甕＞96は須恵器甕である。ロクロ成形・口縁が外傾し、先端部が外反している。

＜須恵器大甕＞調査区北の埋没沢を中心に出土した。破片資料しかないため、分類は行わず一括した(69・96～100・102)。平行タタキメＡ類が主体を占めている。

＜須恵器壺＞101は須恵器壺の体部破片である。ロクロ成形。

＜須恵器小型壺＞２は小型壺の底部破片である。内外面ロクロナデ、底面回転糸切り無調整である。

今回の調査で出土した土師器・須恵器の所属時期は、土器の特徴から概ね９世紀後半～10世紀前葉であると思われる。

３　近世の遺物

(1) 陶器・陶磁器

陶器・陶磁器は中コンテナ１箱分出土した。瀬戸・肥前産陶磁器や在地産陶器・陶磁器等が出土している。このうち、形状・染付が明らかなものを選択し、合計55点を掲載した。

＜肥前産陶磁器＞器種は碗・皿・湯呑みがある。10・11・38・40・44・50・51・107は碗である。43・111は皿である。106は湯呑みである。出土傾向を見てみるとＳＫ06・07から出土する傾向が認められる。遺構外出土遺物も調査区中央より南から出土する傾向がある。所属時期はいずれも19世紀前半代であると思われる。

＜瀬戸・美濃産陶磁器＞器種は碗・皿がある。20・22・28・39は碗である。21・24・27・46は皿である。出土傾向を見てみるとＳＫＩ03・ＳＤ01Ａ・ＳＫ06～08から出土している。遺構外出土遺物も調査区中央より南から出土する傾向が認められる。所属時期は碗は概ね19世紀前半代、皿は18世紀後半～19世紀前半代であると思われる。

＜在地産・不明陶磁器＞器種は碗・小碗・皿・甕・蓋・瓶・急須・湯呑・土瓶蓋・香炉がある。30・37・41・42・109は碗である。23・25・45・58は皿である。18は小碗である。26は甕である。29は蓋である。48は急須である。54は瓶である。57は香炉である。108は湯呑である。112は土瓶蓋である。出土傾向を見てみるとＳＫＩ03・ＳＤ01Ａ・ＳＫ06～08・Ｐ98から出土している。遺構外出土遺物も調査区中央より南から出土する傾向が認められる。所属時期は19世紀代のものが主体を占める。

＜火鉢＞９・49は火鉢である。９は体部半ば～底部にかけて残存した個体である。体部はロクロ成形されている。また、窓を設置された痕跡は認められない。底部には半球状の突起が二ヶ所貼付されており、位置関係から三足であると判断した。所属時期は19世紀前半代であると思われる。49は体部破片であるが、９と調整技法・胎土が類似していることから、火鉢であると判断した。

＜擂鉢＞59・105擂鉢である。59は口縁から底部まで残存している。105は口縁部～体部上半にかけて残存している。所属時期はいずれも19世紀前半代と思われる。

＜ほうろく＞103はほうろくである。所属時期は18世紀後半代と思われる。２もほうろくであると思われるが、確証がない。ほうろくであるとすれば19世紀（後半？）代と思われる。

＜瓶＞104の１点のみである。底部破片であるため詳細は不明である。所属時期は形状・出土位置から、近世以降と思われる。

（2）石 製 品

石製品は４点出土し、全点を掲載した。砥・磨石がある。
＜砥＞32の１点のみ出土した。
＜磨石＞31・56・63の３点は磨石である。31はほぼ全面磨られており、一部に擦痕が認められる。56・63は側面の一部を除いてほぼ磨られている。63には炭の付着が認められる。

（3）土 製 品

土製品は７点出土し、全点を掲載した。土製人形・面擦（泥面子）等がある。
＜土製人形＞33は馬の胴部である。
＜面擦（泥面子）＞19・62は布目痕、34は人の顔、35・60・113は不明。いずれも18世紀後半から19世紀前半代のものに類似している。

（4）金属製品

金属製品は９号袋１袋分出土している。大半が近現代の遺物である。所属時期が近世以前のものは煙管１点のみである。
＜煙管＞６は煙管の吸口である。所属時期は18世紀末～19世紀前半代であると思われる。

4 ま と め

今回の調査では調査区北側から縄文時代の陥し穴状遺構、中央付近から近世の井戸跡・土坑・溝跡・柱穴状土坑が検出された。このことは調査区付近は縄文時代には狩猟の場として、近世には居住域として土地利用されていたことを示している。また、調査区北側から検出された堰沈沢からは平安期の土師器・須恵器が出土しており、調査区周辺に平安期の集落が存在する可能性が想定されよう。近世遺構は概ね18世紀後半～19世紀前半のものが多く、19世紀前半代のものが主体を占めている。

近世遺構が主体を占める19世紀前半代という時期には神山家の住居があったといわれ、医者街道を開削した神山丁安が活躍した時期と重なる。丁安は沢内村の小田嶋嘉左衛門と共に現在の花巻市尻平川から北上市新打沢を経由して沢内村七内に至る道路開削を行った人物として知られている（『笹間村誌』）。実際の工事は猫塚彦四郎が行い、弘化３年（1846）に完成したという。丁安が医者であったことから、人々はこの道路を医者街道と呼んだという。なお、猫塚彦四郎は花巻村日居城野田地等の新田開発にも深く関わっている。

そこで、最後に本地域の新田開発について簡単に触れる。本地域は盛岡藩の新田開発の中において最も成功をおさめた地域であり、前述した猫塚彦四郎も新田開発にも関わっていることから、近世の金栗Ⅰ遺跡を考える上で、必要であると感じたからである。

寛文４年（1664）盛岡藩二代藩主南部重直が跡取りを決めないまま死去した。本来であれば領地没収の事態である。翌５年（1665）幕府は盛岡藩10万石のうち８万石を重直の弟重信に、残りの２万石を弟直房に相続させることとした。そのため、盛岡藩は減少した２万石を補うため、寛文９年（1669）

に新田開発促進令をだした。50石（一部の地域では100石）を上限として新田開発を認めるもので、土地を無償で提供し開墾を奨励した。しかし、自然・地理的環境等の影響から、新田開発が活発に行われたのは（一部例外はあるが）盛岡市以南の北上川中流域、特に和賀・稗貫郡内であった。

天和２年（1682）の調査によると個人の開田は123人が行い、新田石高は4,026石余である。なお、村で行った新田開発は14ヶ村32ヶ所、新田石高2,152石余である。藩営の新田開発としては奥寺八左衛門が行ったものがもっとも大きい（註１）。八左衛門が行った村崎野新田の開発は奥寺上堰・下堰の通水によって開墾が進み、約7,600石の検知高を上げるに至っている（註２）。上堰は寛文５年（1665）に着工し、完成したのが延宝３年（1675）である。下堰は延宝４年（1676）に着工し、同６年（1678）に完成した。（第５図参照）

奥寺上・下堰は北上市横川目地内の和賀川から取水している。取水口付近は穴堰で通水しているが、当初は穴堰の掘削・通水がうまくいかず、失敗続きであった。このため、八左衛門は秋田の阿仁鋼山から竹村・猫塚氏等の技術者として招き、ようやく穴堰の掘削・通水が成功したという。このとき招聘した技術者のうち猫塚藤次郎は、堰通水の功績をもって、五十石取りの二ノ通刀差の身分を許されている。

猫塚氏は後年笹間村に定着し（現在でも木遣跡の北東に猫塚の地名がある）、子孫は新田開発を相次いで行っている。孫の三代藤次郎は寛保４年に十地開拓のことを藩に申し出、開拓を認められている。その後開拓によって生じた栃内村の田地五十石を所領とし、百四石取りの盛岡藩士に取り立てられ、和賀稗貫郡の川の普請奉行を命じられている。三代藤次郎の孫の彦四郎は天保７年（1836）花巻村日居城野田地百石を開拓した（猫塚新山と称されている）。また上根子ならびに笹間村六本木林の栃内林横森等五十石を開拓している。その功績をもって百五十石を与えられている。晩年は後藤野清水野等の開拓を企て藤倉山を貫通して北本内川の水を尻平川に移すことを目的として測量を行うが、実施には至らず嘉永七年（1854）に亡くなった。なお、彦四郎は晩年沢内村の小田嶋嘉左衛門と神山了安からの依頼で、花巻市尻平川から北上市姉打沢を経由して沢内村七内に至る道路を開削したと言われている。この道路は弘化３年（1846）に完成したと言われている。

今回の調査成果は資料数は少なかったが、本地域においては数少ない近世資料が出土しており、整理・報告書作成段階ではできうる限り近世資料を多く報告することを上限に入れて行った。しかし、資料の提示にとどまり、その調査成果についての検討が不十分であることは否めない。今後、類例が増加した段階で検討が行われることに期待したい。

最後になりましたが、野外調査・室内整理時には委託者である花巻地方振興局上本部をはじめ、野外作業員、室内整理員の方々に多大なるご協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

註

1．藩営の開墾は、藩が費用をだし、開墾者に耕作権を与え本百姓に取り立てた。また、踏上が開墾費をだし、開墾に従事した人を小作人として、所有権は踏上の地名代名義で所有することとし、新田分を加増する形をとった。地方給人は、与力新田として、給人高を加増する形をとった。これら知行新田の代表例は、松岡藤右衛門が開墾した松崎新田である。松崎新田は明暦２年（1656）松岡藤右衛門が藤根村に開口を企画し、藩に公認されたものである。松岡堰（猿田堰）を開削し、和賀川より通水し灌漑・開墾を行った。松崎堰は寛文八年（1668）に完成した。その灌漑範囲は横川目・藤根・清田・江釣子・鳩岡崎・北鬼柳・黒沢尻八ヶ村にわたり、開墾された新田高は3,800石余である。

2．貞享２年（1685年）で5,700石、元禄六年（1693年に）で6,891石の検地高を上げている。

第8表　遺物出土量一覧

（単位：g）

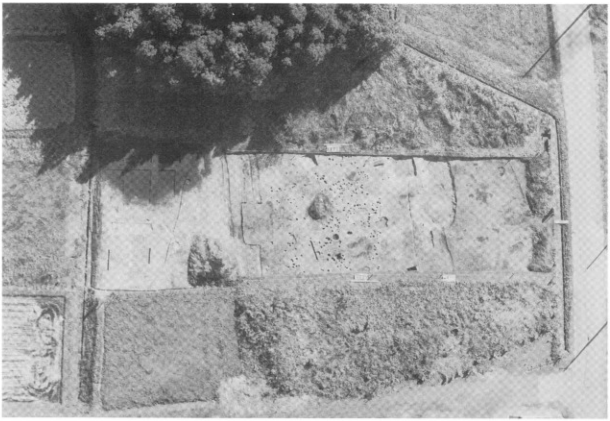
新遺構名	出土位置	土師器	須恵器	陶磁器	石　器	土製品	金属製品	ガラス
SK103		118.31	—	—	—	—	—	—
SK05		—	—	1.31	—	—	10.19	—
SK06		1113.54	78.73	1634.41	3181.41	19.88	—	—
SK07		25.80	—	598.84	—	—	—	—
SK08		212.78	—	387.01	929.80	—	—	—
SD01A		25.90	—	119.98	—	7.48	—	12.55
SD01B		216.15	—	11.29	—	—	—	—
SD02		18.86	—	—	—	—	—	—
SD03		149.47		11.29	—	—	—	—
SD04	焼土	12.94	—	—	—	—	—	—
SD06		4.77	—	1.37	—	—	—	—
SD07	ベルト崩土	2.69	—	—	—	—	—	—
SD10	堆土	—	—	1.31	—	—	—	—
SD12	堆土	15.49	—	—	—	—	—	—
SD13	堆土		8.17	—	—	—	—	—
P34	堆土	11.33	—	—	—	—	—	—
P41	堆土	4.50	—	—	—	—	—	—
P58	焼土	3.16		—	—	—	—	—
P91	焼土	1.96	—	—	—	—	—	—
P98	堆土	3.70	—	0.96	—	—	—	—
P103	堆土	3.38	—	—	—	—	—	—
P112	堆土	3.89	—	—	—	—	—	—
P158	堆土	43.58	—		—	—	—	—
P159	堆土	6.18	—	—	—	—	—	—
P160	堆土	9.54	—	—	—	—	—	—
P165	焼土	1.36	—	—	—	—	—	—
P185	焼土	13.06	—	—	—	—	—	—
P210	堆土	—	—	—	1567.05	—	—	—
WD1c		—	—	34.28	—	—	—	—
WD2a		8.66	—	—	—	—	—	—
WD5d	Ⅲ層中位	84.90	—	—	—	—	—	—
WD6d	Ⅲ層	86.68	—	—	—	—	—	—
WD6e		127.24	29.85	—	—	—	—	—
WD7c	Ⅳ層	14.92	—	—	—	—	—	—
WD7d	Ⅲ層	64.19	—	—	—	—	—	—
WD7e		388.84	41.92	—	—	—	—	—
WD8d	Ⅲ層	173.29	—	—	—	—	—	—
WD8e	Ⅲ層	656.01	135.31	—	—	—	—	—
WD9c		0.00	0.00	39.47	—	—	—	—
WD9d	Ⅲ層中位	74.76	42.45	—	—	—	—	—
WD10a	Ⅲ層	2.83	44.71	274.03	—	—	—	—
VC2j	Ⅳ層	6.27	—	—	—	—	—	—
VC3i	表採	12.77	—	—	—	—	—	—
VC4j	Ⅲ層	21.67	32.58	—	—	—	—	—
VC6j	Ⅲ層	—	4.62	—	—	—	—	—
VD1a	検出面	87.32	—	0.88	—	—	—	—
VD1c	表土	—		18.37	—	—	—	—
VD2b		19.17	—	—	—	—	—	—
VD4a		—	10.73	—	—	—	—	—
VD4b	Ⅲ層	3.72	—	45.36	—	—	—	—
VD5a	Ⅳ層	66.55	—	—	—	—	—	—
VD5b		54.44	—	—	—	—	—	—
VD8e				6.48	—	—	—	—
VD8e	Ⅲ層	15.73	—	—	—	—	—	—
T1		715.39	15.68	3.35	—	—	—	—
T2	Ⅲ層	179.46	15.68	474.12	—	—	—	15.68
T3	Ⅰ層	37.77	—	6.83	—	—	—	7.77
調査区北	Ⅲ層	780.54	8.09	6.83	—	—	—	—
調査区中央		37.12	—	—	—	—	—	23.45
調査区南		—	—	148.21	—	—	—	—
合　計	遺構内	1851.01	86.90	2756.48	5678.26	57.36	10.19	12.55
合　計	遺構外	3740.24	381.62	1058.21	—	—	—	23.45
		5590.28	468.52	3814.69	5678.26	57.36	10.19	36.00

写 真 図 版

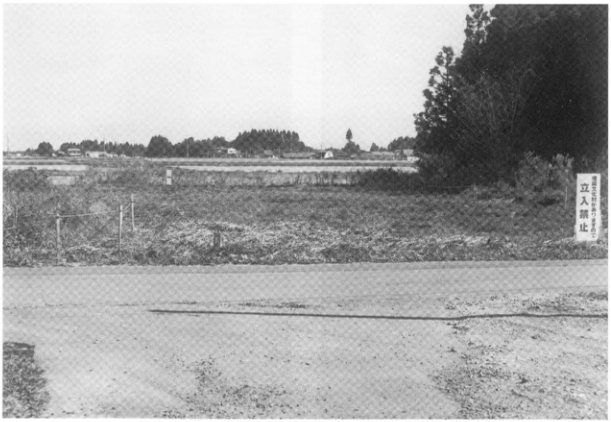
南から

西から

写真図版1　航空写真

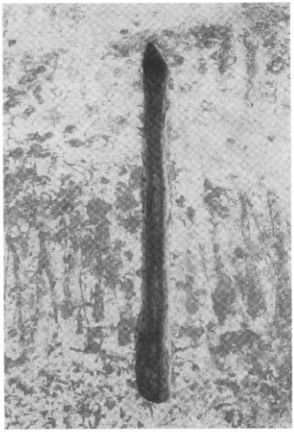


調査区全景（W→）

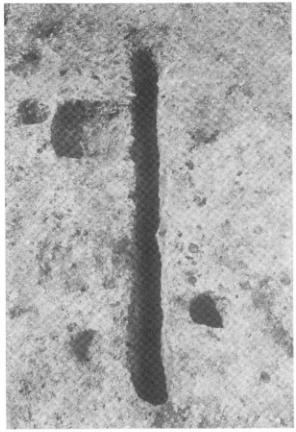


調査前風景（S→）

写真図版２　調査区全景・調査前風景



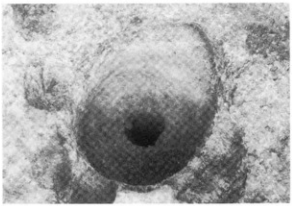
ＳＫＴ01　完掘（Ｅ→）



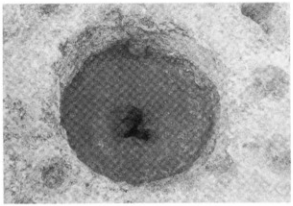
ＳＫＴ03　完掘（Ｅ→）

ＳＫＴ01　断面（Ｗ→）

ＳＫＴ03　断面（Ｗ→）



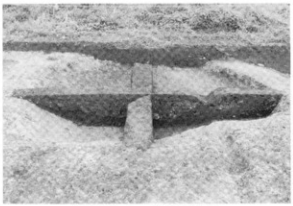
ＳＫＴ04　完掘（Ｓ→）



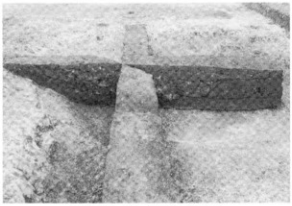
ＳＫＴ05　完掘（Ｓ→）

写真図版３　陥し穴状遺構

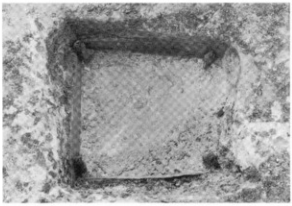
SK103　完掘（E→）



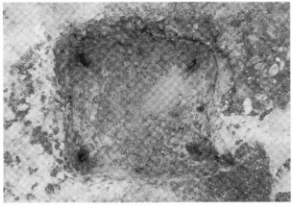
SK103　A－A'断面（W→）



SK103　B－B'断面（S→）

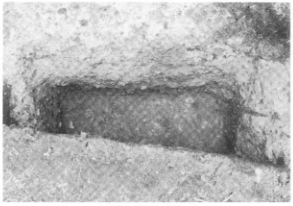


SE01　完掘（E→）

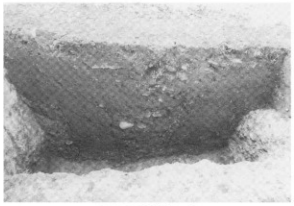


SE01　最終完掘（E→）

写真図版4　竪穴状遺構・井戸跡

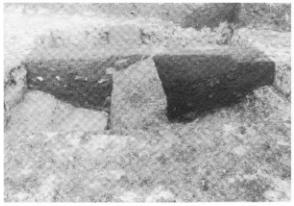


S K05　完掘（W→）

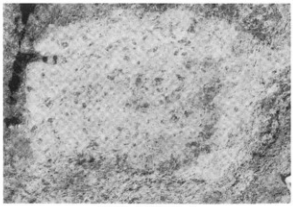


S K05　断面（E→）

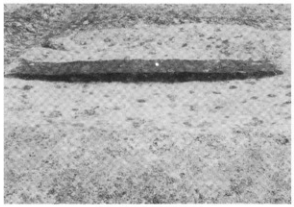
S K06　完掘（E→）



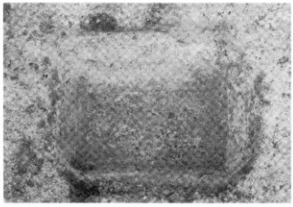
S K06　A－A'断面（W→）



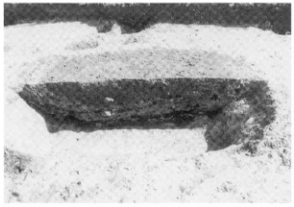
S K07　完掘（E→）



S K07　断面（W→）



S K08　完掘（W→）

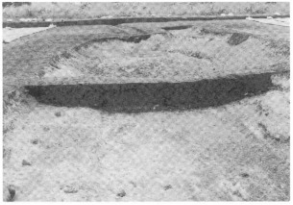


S K08　断面（W→）

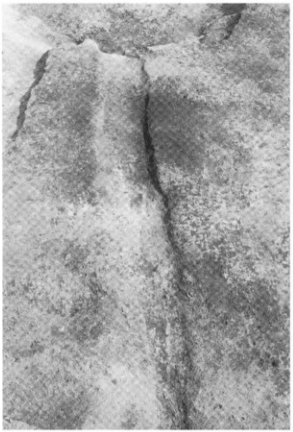
写真図版5　土坑

SD01A・B　完掘（W→）

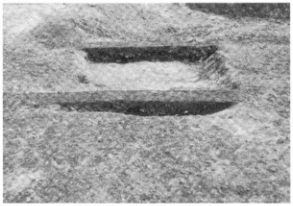
SD01A　A－A'断面（W→）



SD01A　B－B'断面（E→）



SD01B　完掘（W→）



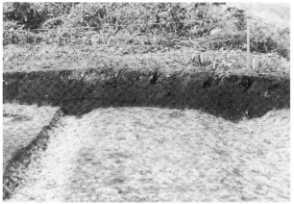
SD01A　C－C'断面（W→）

SD01B　C－C'断面（W→）

写真図版6　溝跡（1）

SD02(左)・03(中央)・04(右)　完掘（W→）

SD01A　柱列（E→）

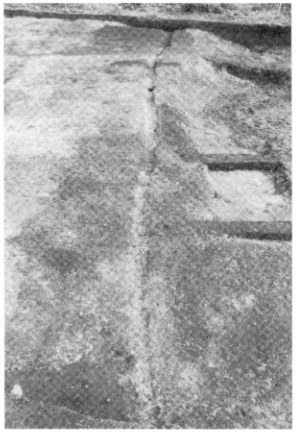


SD02(右)・04(左)　C－C'断面（E→）

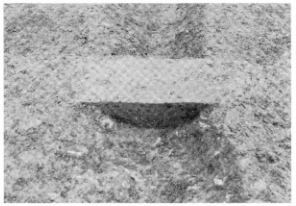
SD02(左)・03(中央)・04(右)　A－A'断面（W→）

SD02(左)・03(中央)・04(右)　B－B'断面（W→）

写真図版7　溝跡（2）

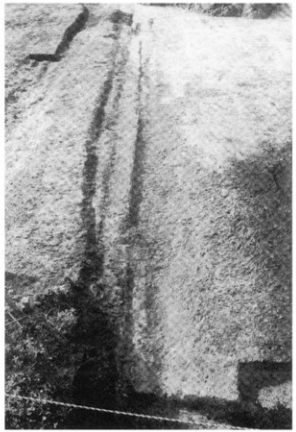


SD05　完掘（W→）

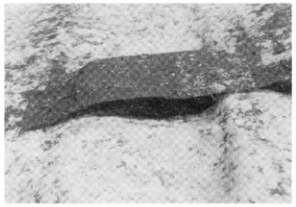


SD05　D－D'断面（W→）

SD05　E－E'断面（W→）



SD08　完掘（E→）



SD08　断面（W→）

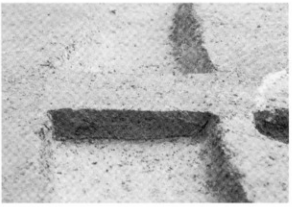
調査区北端全景（SE→）

写真図版8　溝跡（3）

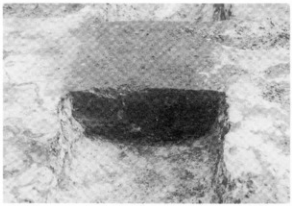
SD06　完掘（NW→）

SD06　完掘（SE→）

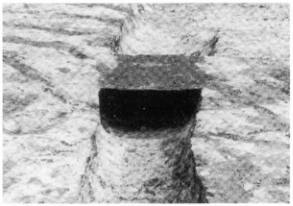
SD06　断面（NW→）



SD06　D－D'断面（NW→）

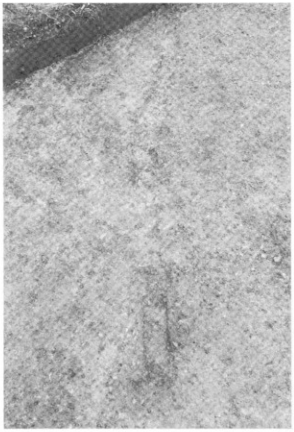


SD06　E－E'断面（NW→）



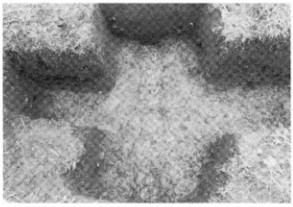
SD06　F－F'断面（NW→）

写真図版9　溝跡（4）

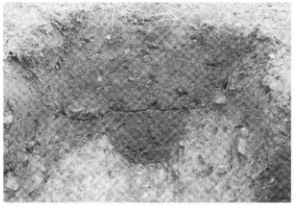


SD09　完掘（SE→）

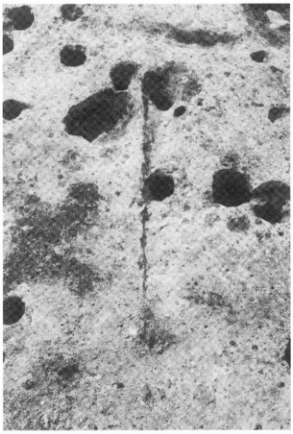
SD10　完掘（E→）



SD11　完掘（N→）

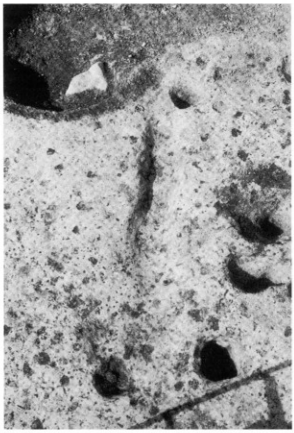


SD11　断面（S→）



SD12　完掘（N→）

写真図版10　溝跡（5）



SD13　完掘（E→）

SD14　完掘（S→）

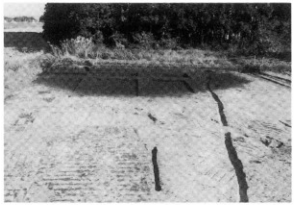
現地公開風景

現地公開風景

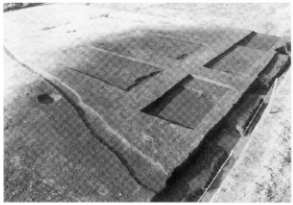
水没状況

写真図版11　溝跡（6）・現地公開風景

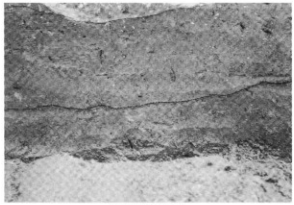
南西から



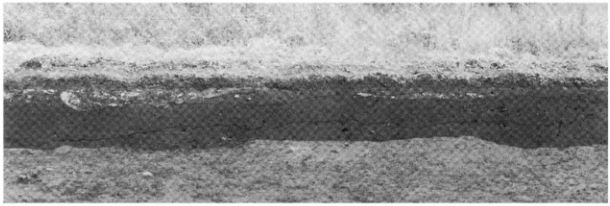
西から



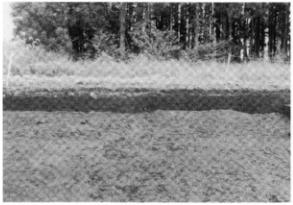
南東から



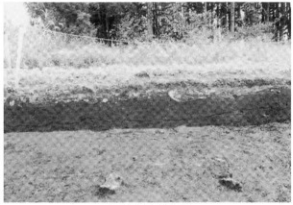
火山灰検出状況



断面（W→）

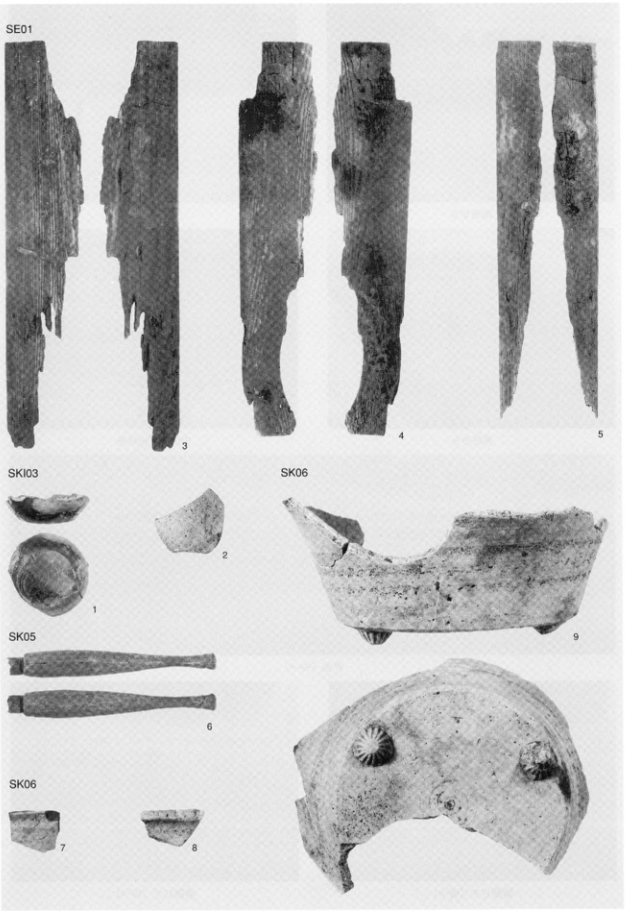


断面ＵＰ（W→）

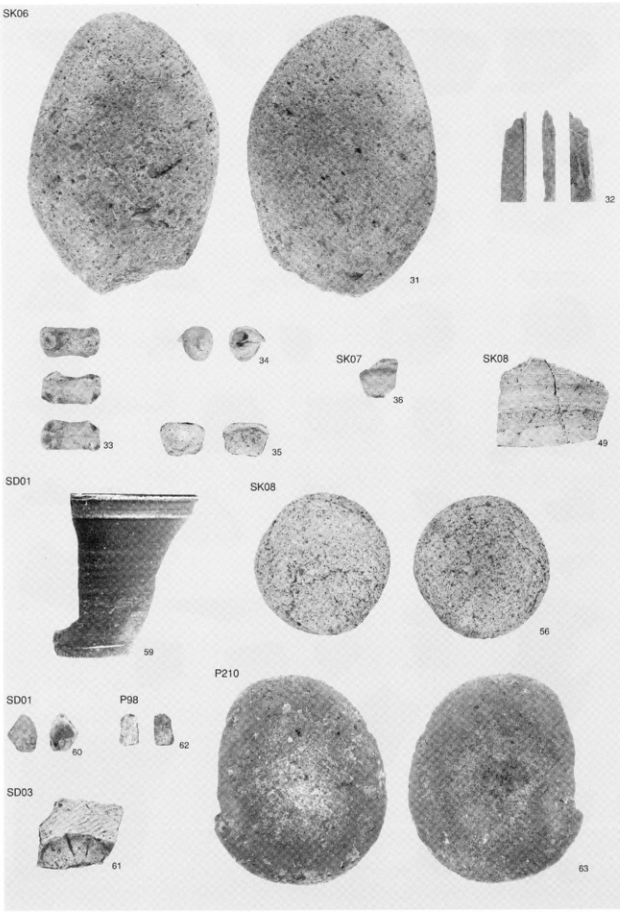


断面ＵＰ（W→）

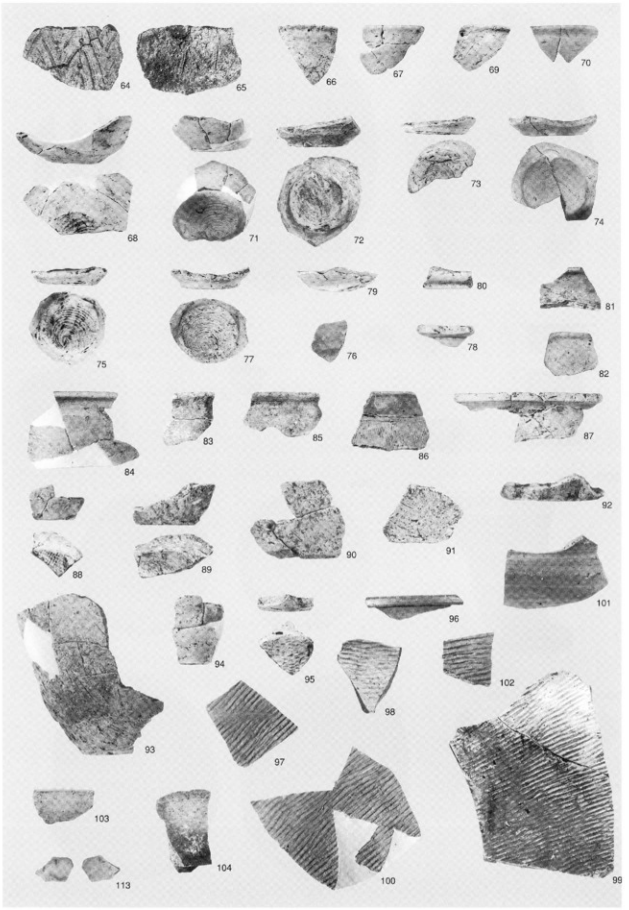
写真図版12　埋没沢



写真図版13　ＳＥ01、ＳＫＩ03、ＳＫ05・06(１)出土遺物



写真図版14　ＳＫ06(２)～08、ＳＤ01・ＳＤ03、Ｐ98・Ｐ210出土遺物



写真図版15　遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	かなぐりいちいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	金栗Ⅰ遺跡発掘調査報告書
副書名	主要地方道盛岡和賀線花巻市笹間地区道路改築事業関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第480集
編著者名	鳥原弘征
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡第11地割185番地　TEL (019)638－9001
発行年月日	2005年12月20日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
金栗Ⅰ遺跡	岩手県花巻市南笹間第1地割45番地ほか	03025	ME44－1350	39度20分15秒	141度03分11秒	2004.09.15～2004.10.20	1,176㎡	主要地方道盛岡和賀線花巻市笹間地区道路改築事業に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
金栗Ⅰ遺跡	散布地	縄文時代	陥し穴状遺構5基	縄文土器	
		平安時代	溝跡1条	土師器 須恵器	
		近世	竪穴状遺構1棟 土坑4基 溝跡15条 柱穴状土坑212個	陶磁器・陶器 （火鉢・灯明皿・擂鉢・ はうろく・瓶） 石製品（硯・磨石） 土製品（面擦・土製人形） 金属製品（煙管）	

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第480集

金栗Ⅰ遺跡発掘調査報告書

主要地方道盛岡和賀線花巻市笹間地区道路改築事業関連遺跡発掘調査

印　刷　　平成17年12月14日

発　行　　平成17年12月20日

発　行　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話（019）638－9001
FAX（019）638－8563

印　刷　有限会社　博光出版
〒020－0122　岩手県盛岡市みたけ５丁目８番43号
電話（019）641－0671

©（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2005